
ガールズハント！！『ルドラ』

ロード 14 / 14

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガールズハント！！『ルドラ』

【Nコード】

N4363E

【作者名】

ロード14 / 14

【あらすじ】

かつて二人の不良がデツケエケンカをやった。片やドラゴン、片やレックス。二人のヤンキーが巻き起こす、青春の中学時代！！ガールズハント！！の主人公、龍と健の暗黒時代の過去を描いた笑いなしの不良学園もの。今ヤンキースが産声を上げる！！基本的に不定期更新。

.....
(前書き)

まあなんつか、書きたいから書きました。
ガールズハントも書いてないのに何やってんだか俺……

.....

ルドラ (rudra)

インド神話で暴風雨神を司る神の名。

『叫び声を上げる者』という意味がある。

これは彼らの物語……

どこにでもあるような不良の物語……

だが彼らは伝説であつた

それ故に……この話も後に伝説となる……

そう……これはただの伝説なのだ。

ドラゴンとレックスという二人の『ルドラ』が生まれた話である。

.....
(後書き)

ま、頑張ります

根性ヤツキ！！（前書き）

これ見てる作者諸兄様へ

ご自分の小説作品で中学時代は不良だった高校生キャラクター、コラボしてみませんか？

できればロードが設定しやすいよう、中学時代の設定があまりなされていないほうがいいです。

あと、現代の龍たちは高一なんであれば同じ年がいいです。

とりあえず一人、募集します。

強さはこちらで合わせます。

もしいいよという方がいらしたらメッセージを。

根性ヤツキ!!

「おう。」

一人の男子生徒が体育館のど真ん中にいたもう一人の男子生徒に話しかけた。

「お前か健……わざわざ春休みに呼ぶなんて……何様のつもりヨ？」

健と呼ばれた、髪をオールバックにして体育館に入ってきた男。

「はあ？俺様に決まってんだろ？ま、いいや。……龍、お前に話がある。」

龍と呼ばれた金髪のウルフカットにニットを被った男は、手に持っていたタバコを体育館の床に捨てた。

「気にいらねエなあ！？いつからテメエ俺を呼び出せるくらい偉くなったんだ？あ？トバすぞ？やるんだろ！？」

「それを含めて、呼んだんだよ。つかテメエもナメた口利いてつと泣かすゾ？」

龍は拳を握り締め、健を睨み付けた。

「いつから……龍……そんなクズに堕ちやがった……」

「ああ！？誰がクスだクソボケが！？」

ツカツカと歩き龍は健に歩み寄ってゆく。

「デメエがクスだって言ってんだよバカやろう！！」

健はその場で怒鳴り、拳を握る。

健の怒号は静かで狭い体育館にビリビリと響き渡った。

それは一年ほど前まで遡る。

桜の花びらが舞う中、新しく入ってきた新一年生達。

そして進級した二年、三年。

みなここで新たなスタートを始めようとする中、一人変わらない人物がいた。

その名は的場龍。

その風貌は立派なヤンキーで、腰パンにニット。
そして耳に付けられたピアスにタバコ。
誰も彼もが龍に近付こうとはしなかった。

ただ一部の人種を除いて……だが。

「おう的場。お前一年ン時あの東堂とやりあったンだろ？どつだつた？」

近付いてくるのは自分と同じヤンキーばかり。

「……………」

龍は無言で席を立ち、教室から出ていこうとした。

「おいおいちょっと待ってみようかの場くん？シカトすんなよ、テメェ誰ともツルまねエンだろ？友達になってやるよ。」

先ほどのヤンキーが先回りして龍の行く手を塞ぐ。
一瞬立ち止まった龍は相手の顔を見た。

「友達……？」

「そうそう！！お友達だ。」

「ハハハハハ……！！アハハハハハ！！」

「な、何笑ってんだよ？」

「……ウゼ。」

龍はそれだけ言うとヤンキーをシカトし、教室から出て行った。

「テメエ待てやクソチビイ！！」

龍の後ろから怒声がし、龍は立ち止まる。

「あゝああ？今なンつったよテメエ！！」

安い挑発に耐えきれなかった龍は極力関わり合いを避けていたヤンキーに突つかかった。

「は！？やるか？テメエどうせイキがつてるだけで大したことねーんだろーがよ！！」

ヤンキーの更なる挑発は続いた。

だがいざ龍が殴り掛かるうとしたとき、不意に現れた男によって龍の腕が止まる。

「何やってんだよ龍？」

「健……」

健はタバコをくわえたまま今度はヤンキーの腕を握り、龍を見る。

「ケンカ？珍しいなオメエがケンカとはヨオ。」

「別に……」

「分かってるつつの。どうせコイツから先に仕掛けたンだろ？俺からよ〜く言っとくからよ。」

健の一睨みで龍は黙り込み、そのまま消えてしまった。

「さてと……俺言っただよな？龍には手出すなって？」

「別にまだ手出してねエだろ！！つうか手離せ！！」

「あゝもゝテメエ喋ンな。ヤキ入れてやるから。」

健はくわえていたタバコをヤンキーの手の甲へと押し付けた。

「ギヤアアアアツ！！」

肉の焼ける匂いが健の鼻を掠める。

健はまるでタバコを手の甲で消すかのように当て続けていた。

「喜べよー、俺直々の根性ヤキなんてあんまり入れてる奴いねエンだからよ〜。」

「くツ！！テメエ離せよコラ！！」

ヤンキーが必死の抵抗を見せ健の手から離れようとする。

が、健は離そうともせず尚も握る手に力を込めた。

「おいお前、根性ヤキついでにギプスまで付ける気かヨ？」

相手の手首にミシツと鈍い音がした。

「わかった！！離してくれ！！俺が悪かった！！」

健はそれを聞くと、手を離しヤンキーを解放した。

ヤンキーは健に目もくれずそのまま立ち去っていく。

「かつかつ！！雑魚が！！」

健は先ほどのヤンキーで消したタバコに再び火を着け、口にくわえた。

だがそのタバコは不意に現れた一人の女性によって横取りされ、健の手を離れる。

「誰だコラア！！」

振り向いた先には健が良く知る一人の女性。

綾川ルミネが立っていた。

「んだよ……ルミ姉かよ。何急に？」

「見てたよ健……」

ルミ姉は龍と健の幼なじみであり一つ年上のお姉さんの存在である。成績優秀、運動神経バツグン、性格……は置いといて、今年受験生の三年生。

「龍を……助けたのかな？」

「さあね。ただアイツなら普通にケンカしても負けねえよ。」

「健とも？」

「さア？つうかタバコ返せよルミ姉。」

健はルミ姉に取られたタバコを取り返そうとするもルミ姉はそれを踏みつけて完全に鎮火させた。

「……何すんだよ？」

「火消したのよ。学校で、しかも中坊がタバコ吸ってイイとでも？」

「あゝ……ルミ姉、俺は女でも容赦なく殴るぜ？」

健の一睨み。

その眼光は一般人どころかそこいらの不良でさえも顔を背けてしまふ位に鋭かった。

だがルミ姉はそんな眼光どこ吹く風で涼しい顔で会話をする。

「殴れるならね。それに先生来てるわよ。それじゃね。」

ルミ姉は長い黒髪をなびかせて踵を返して去っていった。

一人残された健は近くにあった鉄柵に蹴りを入れて鉄柵をひしゃげさせた。

根性ヤツキ！！（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

み『初めめましての方もそうでないかたもこんにちは。ガールズハントのマスコットキャラクターのみいです』

サ『略してマスキャラです。ルークとヤンみたいにあげてくんでよろしく私はサリーですよろしく』

み『作者もネタが尽きたのかすでに他者の力を借りようとしているつばいね』

サ『生来が腐ってますからね。いつそ腐りきって転生した方が楽でしょう』

み『まあなんだかんだで続きが出ました珍すい〜ですよね早いところ書き上げよって感じですよねガルハンの』

サ『ところで今ヘルシングの八巻がありませんガチで』

み『どうでもいいですが最近ベルセルクのファルネーちゃんにグツときます。あと指の皮がなくなりました痛い激痛が襲います』

サ『ほぼ作者の近辺情報しか語らないと思います。こんなんでも応援してね？ちなみに八巻は家出しました』

み『じゃ次回にアデュー』

TSUTAYA（前書き）

彼女募集中！！
って言ってみた。

T S U T A Y A

なんとなく不穏な空気のまま終わってしまった一日。

結局その日は龍は入学式に姿を見せず、健も姿を現さなかった。

そしてそのまま入学式の日の夜……

夜道を一人歩くひとりの青年がいた。

手にはすぐ近くのサンクスで買った食料品の入った袋がある。

「ンンンンンンンンンンンン」

鼻歌混じりで歩を進め、ある家の前で足を止めた。

ピンポーン

玄関のチャイムを鳴らし、中からの応答を待つ。

「ハイ誰ですか？」

程なくして幼さの残る声の中からし、ドアが開いた。

「あ!!健君!!」

「ウィッス美羽ちゃん。相変わらず元気いいね。」

健は自分より頭二つ分は小さい美羽の頭をワシワシと撫でる。

言わずもがなここは龍の家だ。

学校ではあまり喋らなくなったとはいえ、昔からの馴染みである二人はこうして時々二人で会う。

今日は健が龍の家にお邪魔するといった具合だ。

「美羽ちゃん、龍いるか?」

「兄いなら……今部屋だと思う。」

「そか、あんがとね。」

健は勝手知ったるといった態度で龍の部屋へと向かう。

「ねえ健君……」

「ン?」

突然背後から声を掛けられた健は曖昧な返事をしながら振り向いた。

「兄いがさ……変な風にならないように……見張っててね。」

「善処するワ。」

健はニヤリと笑って龍の部屋へと向かった。

「おう龍、俺だ健だ。開けるぞ?。」

健は龍の部屋のドアノブを回し中へと入る。

「……よう。」

中には龍がタバコを吹かしながらテレビを見ていた。
多分NHKの番組だろう。

「これ土産。氷結とカクテルパートナー。あと堅揚げポテトのブラ
ックペッパーに……柿ピーな。」

「おお、悪いな。」

龍は急いでテーブルの上を片付け、堅揚げポテトの封を開けた。

「氷結かカクテルパートナーどっちがいい?。」

「カクテルパートナー。」

龍は健の買ってきたカクテルパートナーを受け取るとカシュッとい
う音と共に、飲み口を開ける。

健も同様に氷結の飲み口を開けて中を喉へと流し込んだ。

「ツツカアアア〜！！うんめエエ！！」

二人の渴いた喉は酒の潤いで満たされて、二人同時に同じセリフを吐く。

「まあなんだ、今日は悪かったな龍。」

「別に言いつて。気にしてねえ気にしてねえ。」

龍はそう言いながら一枚、堅揚げポテトを摘んだ。

「で、健よオオ。今年の一年は結構やんちゃそうなのは集まったンかヨ？」

「あ？ああ、めばしいやつは居そうだな。俺は入学式出てねえからわかんねエけどよ。」

二人は会話をしつつも手にした酒をもう一度口に含んだ。

「龍も東堂さんとやってからすっかり大人しくなったよなあ。」

「勝てなかったからな、それに今は何もかもがメンドイからな。何もやる気が起きねえ。」

龍はタバコをくわえそれに火を着けると一服煙を吐いた。

健も龍から貰いタバコをし、龍のタバコに近付けて火を着けた。

「ふう〜……でよ、健。お前は何で自分の軍団作ってンだよ？何？

戦争でもすんの？」

龍はタバコを健の方へ向けて半ば冗談気味に言った。

健はと言うと、真剣までとは言わないが、冗談ではない顔付きで答える。

「やるよ。」

たった一言。

一言だが龍には思い一言に感じられた。

かつての幼なじみが同じ不良とは言え、今や軍団の頭に座りケンカをおっ始めようとしている。

龍には健が何か遠くの存在、自分とは違う存在のように思えてならなかった。

「へえ、どことヨ？」

「どこ……か。まずは俺らと同じ年で等々力ことロッキーが頭の江波中の軍団だろ、あと江崎がいる港北中だ。」

「結構……手強いな……」

「ああ……。」

健が長くなったタバコの灰を灰皿に落とす。

「だからさ、龍。俺と組まねえか？オメエがいたらよお。」

「却下。俺は不良だけど不良達とはもうカラまねェんだ。やり返されたらやり返す。俺はそれだけだ。」

「友達無くすぜ龍？」

「いーよ俺にはお前だけいてくれりゃ。」

龍は大きくタバコを吸うと煙を吐いて火を消した。

「嬉しいこと言うなお前。ホモかよ。」

「アホか。つつか言っただろがよ、メンドイって。」

龍は笑いながら二本目のチューハイを開けて健も二本目を開ける。

「ツツカアアアア！！」

そして先程と同じく酒を一気に飲み干し二人でオヤジ臭い声を上げた。

タバコに酒……この部屋は完全に溜まり場と化している。

「そいやあ龍、お前母ちゃん大丈夫なンかよ？あと美羽ちゃん。」

「何が……？」

龍はあー……と言いながら背を伸ばし、曖昧な返事をした。

「だからさあ、お前ン家の事だよ。だってお前父ちゃん死んでからずっとお前の母ちゃんが一人でお前と美羽ちゃん育ててきたじゃん？」

「だから？」

「母ちゃんもつと労ったれよ。お前が不良^{バカ}やって大変だろうし、美羽ちゃんだって……」

「あゝ！！ヤメヤメ！！ヤメろよ健、辛気クセエ！！」

健が話そうとしたことは龍が大声で遮り強制的に終了させた。

「わアったよ、もう何も言わねエ。だからキレンなつて。」

……龍の家には父親が居ない。
ヤクザの鉄砲玉として死んでいるからだ。

それからはまだ年齢的には若かった龍の母親が女手一つで龍と美羽の二人を育ててきたのだ。

当然周りからの援助もあったが。

「さて、と……これからどうしようかね。」

「何だよ、泊まってけよ健。あとTSUTAYAでホラー映画借りようや。」

「お前アレだろ？ホラー映画ひとりで見れないからこの機に借りるつもりだろ？」

「うるせ……！！」

少し怒った口調になるも、はにかむ龍はまだまだ幼さが抜けない笑みを浮かべる。

「じゃ泊まるか。あ、ベッド貸してな龍。」

「ざけんな。テメエは床で寝とけ。」

「じゃあ美羽ちゃんと一緒に寝るぞ？」

「そんな時やテメエ、マジでブツ殺すかな。」

他愛もない冗談を言い合える、そんな仲。龍にとっては健といえることが一番幸せだった。

ただ一人、自分を理解出来る奴だと思っていた。

だがいつかは終わりというものはやってくる。突然に、はたまた理不尽に、やってくるものなのだ。

そしてそれは二人とて例外ではなかった。

TSUTAYA（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー!!』

み「出てるよ続きが続いてるよルドラ!!こんにちは、みいです」

サ「こんにちはサリーです。ちょいと作者はブロークンハーツです。悲しい別れ。」

み「まあ夏だから祭りとか野球とかアレな季節ですが作者は相変わらずの小説です。あとは野球です青春時代です」

サ「いやまあ夏には最後の夏の大会があるんだけどね」

み「それ以外には何もないわけでそろそろ私の出番が欲しい今日この頃ファンが泣いてるのよね私の」

サ「ファンとかないよね？あと坊主頭にはラインを入れればいいけど、学校厳しいのよね」

み「下手すれば五厘だしね」

サ「正直いらなくないこのコーナー？作者書くことないっしょ？」

み「リミッター解除すればイけるっぽい。マジでカオスになるけど」

サ「後書きでアカウントもどうかと。」

ゆうじ（前書き）

ガンバレやーいー！

ゆーじ

次の日、的場龍と安達健は当然の如く学校を遅刻した。

意外にも遅刻はあまりしない二人だったので、起きた時にはスゴク焦ったようだ。

そして結局学校に着いたのは昼休みであった。

「あつちいゝ！！走りすぎたぜチクショー。」

完全に遅刻する時間だったにも関わらず、龍はいつもの癖で走ってしまい、只今自分のクラスで下敷きの団扇を扇いでいる。

誰も遅刻してきた龍に興味を示したりしない。

いや、示すことができない。

下手にかかわり合って火傷をする馬鹿なこととはしないのだ。

ただ一人を除いては……だが。

「よつ場的場くん。」

「……………何？」

昨日龍に絡んできたあの不良が懲りずにまた龍に近寄ってきたのだ。

「何？何だつて？テメエが昨日よおお、俺にケンカ売りやがったから健に根性焼き入れられちまったじゃねエかよ。」

そう言う Yankees は自分の手の甲に残された痛々しい火傷の跡を見せつけた。

勘違いも甚だしい……。

自分は絡んで欲しくない、そう言う態度を取ってきたのに何故自分に絡んでくるのだ……？

龍にとって、今は友達と言えるような奴は健しかない。健だけでいい。

「だからちよつと付き合ってくれよ。ブン殴るからよ。」

「ヤダね。」

無表情で拒否をした。

だがヤンキーはその態度にキレて、龍の胸倉を乱暴に掴んだ。

「テメエマジで調子こいてツとブツ殺すゾ！？いいから来いやチビ！！」

「……懲りねえな。それに付き合えた？アホか？ここでやりやあいだろ。今、ここで……よ！！」

手にした下敷きを相手の顔に投げて怯んだ隙に、座ったまま相手の膝を蹴った。

「ぐッ……!!」

「飛べオラア!!」

龍はバランスを崩した相手の顎にアッパーを叩き込む。

「ぐぼアッ!!」

血しぶきと共に砕けた奥歯が教室に飛び散った。

「あがが……が……!?!」

「まだ意識あるんだ?じゃあトドメさを刺さないでだね。」

「や……やべて……」

ずっと上げた足を相手の顔の上に持っていき思い切り鼻を踏み潰した。

ゴキッという鈍い音がし、ヤンキーの鼻が異様な方向へと曲がる。

「ギヤアアアア!!」

「伊達になったなオメエよお。ハッハハハ!!つかウルセエって。」

罪の意識もない龍は鼻を押さえて転げ回る相手を笑いながら覗き込んだ。

程なくして叫び声で駆けつけてきた健とその取り巻きの数名の不良が教室の惨状を見て絶句した。

「こりゃあ……どーいう……」

「……………」

龍と健は互いに目を合わせたまま喋らなかつた。

クラスメートも事の顛末をただ見守ることしかできない。

「ぐが……鼻……はがが……」

「祐二！！おい大丈夫か！？」

健の取り巻きの一人が龍にやられたヤンキーこと祐二に気付き駆け寄る。

「おい大丈夫かよ！！……テメエクソガキヤア！！」

「ヤメロ！！」

今まさに龍に殴り掛かろうとした所を健に止められた。

「でも健、コイツは祐二をやったんだぞ！？」

「わかつてる。でもなジヨット、オメエが勝てる相手じゃねエ。」

確かに、ジヨットが殴り掛かろうとした時、既に龍の拳はジヨットの顎に叩き込まれんとしたところだったのだ。

「チツ……やってみなきゃわかんねえぜ？」

「だからヤメロつつつてンだろうが。テメエ、俺に顎砕かれてエンかヨ？」

「……わかった。でもな、お前がいくらコイツを庇っても、いつかは我慢出来なくなるぜ。」

気まづくなつた空気の中、遅れてやってきた教師達が教室を見て固まった。

「こ……これは一体……！？誰だこれをやったのは！！！」

教師の一人が大声で問うも、教室のクラスメートは誰一人として何も言わない。

あとの報復がみな怖いのだ。

だがそんな中、龍が無言で教師達の前に歩み出た。

「俺がやったよ。」

短く、極力教師とは話しながらない龍がたった一言だけそう告げる。

だが理由云々は関係なく、かねてから問題児である龍を連行するには教師達には十分だった。

「花村先生、怪我人を保健室までお願いします。あとの場、お前は付いて来い。」

そう指示する教師に龍はただ黙って付いていく。

だが健は知っていた。

龍が自ら手を出すことはしないと。

また祐二が龍にケンカをふっかけたか、もしくは手を出したのだろう。

龍は健と目を合わすことなく、教室から出て行った。

「あ、龍……。」

途中すれ違ったルミ姉が教師の後を不機嫌な顔で付いていく龍を見て声をかけたが、龍は目もくれることなく行ってしまった。

「さて……どういうことだ的場？最近大人しくなったと思ったらまたケンカして……」

「別に……」

「別にじゃないだろ！！何でケンカなんかした？」

龍の目の前にいるハゲがかかった教師……何かと龍を目の敵にしているが、大方学年主任を任されたから問題を起こす人種が嫌いなのだろう。

自分の利益だけを考える汚えゴミみてえな教師……龍が一番嫌いな

タイプの教師だった。

「じゃあ逆に訊くけど何でケンカしちゃダメなんだよ？」

「……ダメなものはダメだからだ。」

答えになっていない答え……

龍はあからさまな態度でハアツと溜め息を吐いて深く腰掛けた。

「わかんねえなら生徒に教えンなよ……」

「的場……先生に向かってその態度は何だッ!？」

「先生、先生つて……先に生まれたただけだろ。それとも何か？アンタは俺に何でも教えられるくらいにもの修めたンか？」

飛んできた唾を拭き取り大胆不敵な態度を取り続ける。

「田川先生、もうそれくらいでいいじゃないですか。」

突然、龍と田川先生二人だけの教室に女性の声がした。

二人が目をやるとそこには長い黒髪をひとまとめにした誰がどうみても美人な女教諭が立っている。

「井崎先生……」

「田川先生、頭ごなしに叱っても意味がありませんよ?」

「しかしですね、」

「私が何とか説得しますから。」

井崎先生は田川先生を部屋から追い出し、龍の向かい側の椅子に座る。

「さて、やつちゃったのか龍は？」

「……。」

友好的な……否、むしろ友達的なノリで話しかけてきたこの教師。名は井崎泉で、珍しく生徒の目線から生徒と触れ合う教師で生徒のみんなから人気を博している。そして唯一龍が心を開いている教師でもある。

「まあこれも青春だわね。」

「……向こうから先にケンカ売ってきたんだからな。」

「でも君は怪我をしていない。なんにせよ、手加減はしなきゃ。」

優しく諭すように言うが相変わらずむくれたままの龍はなかなか井崎先生の言うことに耳を貸そうとはしない。

「やるからには……全力でトバす。」

「全く……そんなことばっかり言って……そろそろ生き方変えなきゃ。まだまだ子供なのにそんな生き方して可愛くないよ？」

「可愛くなくていいよ。もういいだろ？俺がやったんだし、怪我させたのも俺。話すことはもう何もないし、俺は帰るぞ。」

井崎先生などお構いなしといった態度で龍は扉を開けて出ていってしまった。

「ふふ……子供扱いしたら怒っちゃった。まだまだ子供ねやっぱり。」

一人残された井崎先生は龍に聞こえない程度に呟いた。

「ンア……ルミ姉……？」

龍が廊下を歩いているとルミ姉と力チ合った。

今は授業中の筈だが優等生であるルミ姉がこんな所で何をしているのか？

訝しながらも、話しかけることなく脇を通り過ぎようとしたら不意にルミ姉から声をかけてきた。

「また……ケンカしたんだね……。」

「……それがルミ姉に関係あんのかよ？」

龍は振り向かずには答える。

「もう……やめなよ。こんな事続けても意味ないじゃない!!」

「意味がない……確かに。だけどさ、俺は全てがメンドイから今の状態になったんだ……今の状態から変わりたくないね……メンドクさい。」

「龍!! いつまでもそんなガキみたいなこと言っでないで、変わろうとする努力をしなさいよ!!」

ルミ姉が一喝し終わると、龍がルミ姉を壁に押し付けたのはほぼ同時であつた。

ルミ姉は龍に押さえられたまま壁に叩き付けられ、手出しができない状態に持ち込まれる。

その距離はキスがすぐ出きるような距離で、端から見れば今にも龍がルミ姉に迫ろうとする様に見える。

「ルミ姉よ……俺に意見すんなら……俺を変えたいなら力づくで変えるしかねエよ。」

「イヤ……よ……!! そんなの結局龍と同じじゃない!!」

「俺らみたいな奴等は……言ってもわかんねエからケンカすんだぜ……? ルミ姉、本気で俺を変えたいと思うなら……俺を潰せ……。」

それだけ言つと手を離し去っていく。

一人廊下に取り残されたルミ姉は壁にもたれ掛かったままズルズルと腰を落としストンと尻餅を突く。

「なんで……あの頃に……戻りたいよ……。」

ルミ姉の目からは涙がこぼれ、頬を伝う一筋の涙となって静かに床に落ちていった……。

ゆうじ（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

み「二日連続更新つてすげえ」

サ「まあ書き貯めしてるからね」

み「関係ないから」

サ「関係あるから」

み「さてルドラでの立ち位置が明らかになってきました」

サ「ただのヤンキーじゃないですか」

み「ヤンキー小説だし」

サ「つうことは私達の出番ははいですな」

み「果てしなく皆無ですな」

サ「猫ミミ少女に需要はないでしょ。むしろ邪魔？」

み「犬ミミ貞子に出番はない。遠吠えしてなさい合成獣」

サ「合体なめるな。あなたと合体したい」

み「無限パンチ!!」

道場やぶり

的場龍はいわゆるケンカ無敗で通ってきた。

小さい頃に父親を無くし、仕事で忙しい母親から十分な愛情を注いで貰えなかった彼は、次第に心が荒んでいきケンカに明け暮れたのは致し方ない末路と言える。

中学に上がってからには更に凶暴性に拍車がかかっていった。

多分彼はどうしようもないイライラなどをケンカで晴らしていたのだろう。

だが彼は中学一年の時、同じ中学の怪物東堂とケンカをして敗北、それから次第に心を閉ざすようになっていった。

同じくケンカ無敗の安達健は家も安定していた。

何が彼の心を変えたのか、それは未だに分からないが一つ言える事は、龍も健も自然と不良となつていったのは確かである。

幼馴染みであり、不良。

組めば間違てっぺんいなく頂点を取れたであろう二人が何故組まなかったのか……

同じ不良と言えど、境遇の違いが違うタイプの不良として二人を育てたのだ。

片やなるべくしてなった不良、片や自らの家庭の境遇でなった不良。

だが彼女は信じて疑わなかった。

まだ彼等は引き返せると、元に戻れると。

綾川ルミネは信じて疑わなかった。

「ただいま。」

龍が帰宅したのは午後4時のことだった。

あの後学校に居ても意味がないと思った龍は漫喫で時間を潰し、家へと帰ってきたのだ。

「誰もいねエンか？」

龍はリビングの方に顔を出す。

「あ、おかえり。」

「ンだよ居ンじゃんよ。」

リビングには美羽がテレビを見ていた。

よほど夢中になっていたのか、龍の帰宅に気付いていなかったようだ。

「母さんは？」

「寝てるよ。今日も仕事あるから。」

龍は冷蔵庫にあった牛乳をラッパ飲みし、元に戻す。

龍の母親はキャバ嬢で、龍はいわゆるできちゃった結婚で産まれた子である。

若くして龍を産んだ母親は、父親が死んだ後せつせと働いている。

「そうか。俺ちよつと出掛けてくるからヨ。メシはいるって言つていて。」

「また出掛けるの……？」

少し寂しい顔で美羽は龍を見る。

美羽はまだ小学六年生だ。

父親もいない、崩れかけた家庭にいる中、ただでさえ少ない家族が居なくなるのが不安なのだろう。

むしろ美羽もよくグレなかったなと、龍は思う。

「ちゃんと帰ってくるから心配すんな。お前は絶対……俺みたいに
なんなよ……。」

龍は制服のまま家を出たとある場所まで向かった。

そこは一つの道場。

小さいころに龍が通っていた道場で、今は行っていないがちよくちよく顔を出すようにはしている。

「チワッス。」

道場の戸を開け一礼し、中へと入る。

道場にはたくさんの門下生と師範らしき人、それとその横に一人の少女が座っていた。

「おう的場くん。よく来たな。」

そう声をかけてきたのはここの道場の師範である芹沢京平。
実戦格闘技の師範にして俺のかつての師だ。

「あ、いらつしゃーい!!」

そしてその横に座っていた少女が龍に飛び付いていく。

少女の名は芹沢^{せりさわしいな}椎茄。

端正な顔立ちにセミロングをひとまとめにしたポニーテールが特徴的で、龍の一つ下にも関わらず身長は龍を抜いている。

彼女自身もそれはコンプレックスと感じているため、門下生の誰もがその事には触れない事になっている。

一応今の門下生の中では一番強い。

「おうおう久しぶりだな椎茄。元気してたか？」

「んもお超元気ですよ！！しかも先輩に会えたから更に元気です！！」

絵に描いたような明るく元気な娘の椎茄は龍から離れる気配はない。

道場の門下生はそれを殺意の目を以て眺めていた。

「わかったわかった、いいから離れ。」

「ンむう……！！」

龍が椎茄の頭を押して離すよう促したため渋々椎茄は龍から離れた。

「相変わらず椎茄は龍くんが好きだな。どうだ？いつか籍を入れてみんか？」

「考えときますよ。」

「マジっすか先輩！？」

師範の冗談に冗談で返したはずなのに、完全に椎茄は勘違いを果たしていた。

龍はそんな椎茄を放っておいて師範との話を進める。

「実はちょっと闘いたくて……暇そうな人は居ませんか？」

「闘いたい……か。生憎君と張り合える位の奴は……」

「私が行きますよ?」

背後から椎茄の声がし、龍にもたれ掛かって話に割り込んできた。

「……じゃあやるか。」

「オス!!」

上着を脱いで道場の中央に行く龍と椎茄。

練習中だった門下生は急いで道場の端に避け、二人の闘いを見守った。

「時間は無制限一本勝負。」

審判は師範が務める。

「手加減なしでこいよ?」

「手加減出来るほど強くないので。」

「始め!!」

師範の合図と共に椎茄が動いた。

一見ゆっくりとした動きだが、見た目ほど遅くはなく仕掛けにくい。急に椎茄が体を捻り跳び後ろ蹴りを放った。

蹴り技では最強の威力を持つ蹴りは龍の鼻先を掠めた。

「危ねッ!!」

着地をした椎茄に龍はすかさず攻撃を仕掛ける。

椎茄も着地と同時に道場の床を蹴り、龍との距離を取った。

「シッ!!」

だが龍が逃がすわけがない。

すかさず跳び蹴りが炸裂し、椎茄を追撃するが椎茄は龍を掴んで床に叩きつけた。

「カフツ……」

「だ、大丈夫ですか!？」

「大丈夫だ……続けるぞ。」

背筋を使い、足を上げた反動で立ち上がる。

「強くなつたな椎茄。」

「一応ですが。毎日訓練してるんで!!」

近くなつた距離。

龍よりも腕の長い椎茄は牽制の為のしょう掌を繰り出す。

一瞬の出来事だった。

腕の長さは確かにし椎茄の方が長い。

だが龍はそれに勝る足の長さを使い椎茄の膝を攻撃、体勢の崩れた所に最低限の力を使った合わせざまのフックを顎に入れて椎茄の脳

を揺らした。

「ナックダウン。」

龍が呟くと椎茄は力無く倒れ、龍はその体を片手で支える。

「勝負あり!!」

五分の闘いとは言い難い、明らかに龍の方が勝っていた。

「すみません。参ったと言わせる手が思い付かなかったんで眠らせました。」

「構わん。しかし相変わらず強いな。秘めたる才能は……計り知れん。」

師範の誉め言葉に龍はペコリと頭を下げる。

「もう一度入門しないか？」

「結構っす。今の俺は……何もかもやる気起きないんで……。」

上着を着ながらそう答えた龍は椎茄が目を覚ますのを待っていた。

意識の飛んだ椎茄が目を覚めたのは闘い終わってから五分後のこ

とで、闘ったときの記憶は綺麗さっぱり飛んでいた。

「あ……あれ？」

「おう起きたか。」

「私……何やってたの？」

「……大丈夫か？」

流石の龍もこの事態には心配する。

だが椎茄は問題ないといった様子で立ち上がった。

「大丈夫です先輩。所で闘いますか？」

「いや、いいワ。」

龍は笑いながらそう言って、師範に一礼をし道場を後にした。

「……………」

まだ確かな感覚を覚えた右手を握り締め、龍は家路を歩き出した。

道場やぶり（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

み「だからお願い！そばにおいてね」

サ「今はあなたしか愛せない」

み「テレサ・テンでこんにちわ」

サ「なんでこう作者は無駄に知ってるかね古い歌。前は天城越えとかあつたし」

み「まあそんなことより梅雨ですよ梅雨。ばいんです、ジメジメした季節はイヤですよホントマジで」

サ「華麗に私はスルーですかそうですね。梅雨はイヤですよね」

み「早く夏になってほしいです」

サ「夏はもつと嫌いです」

み「意外に夏とかって遊びに行く気失せるんだよねミィは」

サ「井戸の中はひんやり気持ちいいです」

み「まあ……後書きに書くことあまりないし」

サ「したら私たちの出番は」

み「果てしなく皆無になります」

サ「見捨てないでくださいね」

み「ガルハン本編もよろしく」

カレー（前書き）

くっは

カレー

「ただいま。」

「おかえりー！！」

「おうおかえりー。」

今の時間は七時半。

一般家庭では既に夕餉の用意をする時間帯で、龍の家でも例外なく夕食の準備をしていた。

「で、なんでお前がここにいんだよ………？」

「お前に会いに来たから………だろ。」

「じゃあなんで食卓の椅子に着いてんだよ？」

「龍のお母さんにご飯に誘われたから………だろ。」

健と美羽がしっかりと椅子に座り、今日の夕食を今か今かと心待ちにしていた。

「ほら健くん、ご飯出来たよー！！」

「うわーお母さん、今日は僕の大好きなカレーじゃあないですかー！！」

「美味しいよー！！兄いも早く座れば？」

コイツは本当にここで食っていくつもりだと、思った龍は諦めの溜め息を吐いて自分も席に着いた。

だがその反面、嬉しいことでもあった。

普段からどこかしら寂しげな表情の美羽^{カオ}が今日はとても楽しそうに笑っている。

一人違うだけでこうも変わるのか……

龍は密かに感謝しつつ『楽しい夕食』を味わった。

「あゝ……喰ったあ……。」

「おかわりまでしやがってデメエ。」

今は夕食も終わり龍の部屋で食後の一服をしている。

「ふう……なんで食後のタバコってのはこんなウメエンだろうな？」

「つうかさ龍、なんで俺がいる時はいつももらいタバコなんだよ？」

「ケチケチすンなよ、俺ア貧乏なンだからよ。」

龍はすはあゝと煙を吐いて話を流した。

健も何か腑に落ちないからか首を傾げ、二本目に火を着ける。

「なあ……龍よ。」

「ン？」

「今俺らン中にはお前を快く思っていないやつがいる……。」

「ふふ……それで？」

別段そんなことは問題ないと言ったような口調で続きを促す。

「いくら俺が押さえてるつつつても限度がある。何時までもやられっぱなしじゃあ俺もあいつらも示しがつかねエからよ。現に祐二の奴がやられてる。」

「だから俺を潰すか……？今ここで……？体面の為に。」

龍はクツクツと笑い火を消して健に問うた。
そして続きを話す。

「だがよ健、俺は守ってくれとは言っていないぜ？お前ンとこの奴らが勝手に仕掛けてきて、お前が勝手に押さえてるだけだ。別にお前は俺の為に立場悪くすることあねエよ。」

「……つまり……最悪お前を潰す……つうことでいいンだな？」

「出来るならな。ただ俺はそんな時ややり返すぜ。俺としてはやられっぱなしじゃ面子がねェからな。」

「上等だよ。」

互いに了承を得たこのいざこざ。

これでもしも龍と健、またはその下の者が闘えど、止める者は誰もいない。

戦争が始まってもおかしくはない状態となったのだ。

そして、皮肉にもそれは最悪のタイミングで起きてしまうのだ。

入学式から五日経ったある日の事……

いつも通りに起きた龍は朝食のパンを食べながら、目覚ましテレビを見ていた。

「ふあゝ……眠ッ……」

いつも通りに起きていつも通りに飯を食べ、いつも通りに学校に行

き、いつも通りに帰って来ていつも通りに飯を食べてそして寝る。

今日もいつも通りの一日が始まるのだ。

「……ふ……ああ……！！クソしょ……。」

朝からトイレに籠もり、新聞を広げてニュースがないか調べる。

とゆったりとしているところに静かな朝には似合わない音が響いた。

トイレのドアを叩く音が。

「兄い……！！いつまでトイレ入ってんの……早く出て……も、漏れちゃう……！！」

「もうちょと頑張つて。無理なら漏らしちまえ。」

龍はバサツと新聞を捲り、次の記事に目を通した。

「早ぐう……！！」

限界が近いと察した龍はトイレを流しドアを開ける。

「空いたぞ。」

「遅いッ……！！」

開くや否や美羽はトイレに飛び込み、鍵を閉めて音消しの水を流す。

『今日の最下位はゴメンナサイ、さそり座のあなた……思いがけないハプニングに見回れて大損害……気を付けて行動した方が良さそうですね。』

占いの結果を告げるアッキーナが今日の最下位、さそり座の運勢を告げた。

「さそり座……」

龍はさそり座であるが、占いは大して気にはしない方だった。そもそも何を根拠にさそり座が最下位と決めつけるのか？

それに全国に何万人さそり座がいる？

いちいち気にしては身が持たないと言うのが龍の考えであった。

「あゝも〜時間だあゝ！！ほら兄いも早く用意用意！！弁当作ってあげたんだから。」

美羽は身だしなみを整えながら龍に弁当箱を投げ渡した。

「それじゃあ私先行くから、あとよろしく。」

それだけ言つと美羽はさつさと出て行き、龍が一人家に残された。

「そう言やあ……美羽が弁当作るなんて久しぶりだな。」

そんな独り言を呟きながら美羽の手作りの弁当を鞆に入れて、家の

鍵をかけて学校に向かう。

自転車通学ではない龍はいつも歩いて学校へと向かう。

時間帯はまだ全然人通りも少ない時間帯で、重なれば時々ルミ姉とも会う。

だが今日は誰もいない。

ガッ!!

急に龍の視界が揺れ、頭に激しい痛みが走った。

「なっ……があ……!!」

急な痛みに龍は膝を突き頭を抑えた。

「だ……誰……だ……コラ……」

頭を割られたかもしれないと龍は思った。

だが頭を押さえても血が出ている様子はない。

ひとまずはまだ頭は割られてはいないようだ。

「俺だよコラ。」

目の前にいるのは逆光で暗くなつた祐二がいた。

顔には痛々しい包帯が巻かれ、パツと見では誰だか分からないだろう。

「よくもまあこの前はやつてくれたよなあ？ 見ろよ、鼻ア陥没しちゃったぜ……。見ろよ、歯が五本も飛んじまった。」

祐二はガパツと口を広げ、龍に痛々しい口の中を見せつけた。

「なんでお前が無事で、俺がこんな姿しなきゃなんねェんだア？ おかしいよな？」

祐二の手にしたバットからは血が滴り落ちている。

龍はこいつ一人ならばと考えるも、周りにも十人程祐二の仲間がいたので諦めた。

不意打ちされなければ、こんな数は余裕で倒せるが。

「さてと……覚悟出来てンよなあ テメエ……！」

「……クソ……！」

倒れたまま、龍はぼそりと呟いた。

カレー（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

サ「T O L O V Eるエツロー!!」

み「よくもまああんなにオープンにできるもんだ。」

サ「規制法が厳しく敷かれる昨今、その道を突き進む漫画に敬意を評する」

み「ところでガルハン本編とギャップが有りすぎるためもう作者はへきへきしているらしいです」

サ「も、いつそ夢落ちで終わらせてもよろしくないすかね」

み「ハンター×2もそれらしく終えますからね」

サ「ピトーは可愛くてゴンはキレてユピーは滅私、ナックルは頑張つてプフは面白おかしく崩壊で、個人的に私はキメラアントでしよるか？」

み「そしてキルアにサックシやられて私は王に踏まれます」

サ「本望だ」

フルボッコ（前書き）

そろそろケンカ入りまゝす

フルボッコ

「シュウウトー!!」

おちゃらけた声と共に祐二のミドルキックが龍の横っ腹を直撃した。

「ぐふっ……!!」

かれこれ10分以上はフクロにされているが、龍にはその時間が那由他にすら感じられた。

もはや自力で立つことが出来なくなった龍は、血反吐を吐きながらも祐二の仲間に無理矢理立たされる。

「まだよお、まだまだ続くからなあ、次はあド・コ・に・し・よ・う・か・な」

「お……い、テメエ……」

口の中を切つて喋ることが容易ではない龍だが、それでも小さな声で祐二を呼ぶ。

「顔……殴ンじゃ……あ……ねエ……ぞ……俺ア……お前と、違……って……イケメン……なんだからよ……」

へっ、と吐き捨てた龍が空いた方の手で中指を立てた。

祐二は眉をひそめはしたが無言のまま龍の顔を蹴り上げる。

「ブハッ!!」

「まだテメエ、ナメた口きいてンのか!!マジでブツ殺すぞ!!」

龍の髪を掴み顔を引き上げ、地面へと叩き付けた。

血で汚れた顔には土が付着し、もはや見るには堪えない。

「ウラァ!!死ねクソチビが!!テメエ!!」

更には追撃で腹にしこたま叩き込まれる蹴りは龍の吐血をさらに激しいものにさせていく。

「はぁゝ……はぁゝ……!!」

「グッ……ウア……」

龍にはもはや立ち上がる気力すら残されていない。
ただのサンドバッグにしか過ぎない存在であった。

「バット貸せ……。ド頭力チ割ってやる。」

「脳みそ出すンじゃあねエゾ祐二?」

「ダハハハ、やってみるか?」

霞のかかった龍の視界に振り上げられたバットが目に入る。

さっきの会話からしてマジのマジで自分を殺す気にいるのが龍には分かった。

……否、殺す気などはないかもしれない。

殺しちゅうかも、そんな気でこいつらは龍をリンチしている。

死んだら死んだでしょうがない、という気持ちで龍をフクロにしたのだ。

（ああ……俺もしたら死ぬンか……？ 今時の中学生って……怖
エな……）

そつと目を閉じ、自分も最近の中学生であるにも関わらずそんなことを思った。

（ふざけんな。そんなフザケタ理由で殺されてたまるか!!）

自分の体が軽くなり、力が漲るような感覚がした。

すぐさま龍は祐二の股間を蹴り、膝を蹴って祐二をひざまづかせた。

「飛べオラァ！！」

そして渾身の力を込めたミドルキックを丁度よい高さにあった祐二の顔に叩き込む。

「ゴアッ！！」

ボコられ、最後の力を振り絞った攻撃ではあったが祐二を倒すには十分な威力だった。

祐二の首はむちうちになったかのように揺れ、後頭部から地面に叩きつけられる。

「ま、まさかあの祐二が一発で！？」

「ありえねエ！！何なんだよテメエ！！」

一撃でやられた祐二を見て周りの奴等がうろたえ始めた。

自分たちが散々痛めつけたはずの相手がまさか反撃し、しかも一撃で倒すなんて、人間技ではない。

瞬殺、周りからは正にその様に見えただろう。

だが満身創痍の龍にとっては今の攻撃は言わばイタチの最後っ屁、もしくは燃えきる前の蠟燭とも言える。

「おら……来い……テメエ……ら……。」

ふらふらになりながらも何とか立つことだけはする。

だが目の前の視界は揺れ、頭は割れるような痛みが走りつづけるのでもしも追撃が来れば間違い無く龍はやられる。

「行こうぜ。付き合ってらんねえよ。」

「マジマジ。もういいや。」

取り巻きの連中は祐二を担いで各々そんなことを言いながら去っていった。

「雑魚……………クソ……………」

一人残された龍は途切れ途切れに呟いてその場に倒れた。

ゆう……………りゅう……………

（誰か俺を呼ぶ声がする……………）

しかし頭が痛い……誰だ……声が頭に響きやがる……クソ……。）

「龍！！目を開けて！！」

龍が重い瞼をつつすらと開くと目の前にはルミ姉が涙目で龍をのぞき込んでいた。

今最も龍が会いたくなかった人物だ。

こんなダサい格好などさらけ出したくなかった。

もつと言えばルミ姉にだけは……見られなくなかったのだ。

（ああ………そうか………俺気絶してたんだ………）

「龍、大丈夫！？私に分かる！？」

かなり取り乱した様子で、龍を抱きかかえたルミ姉。揺らすごとに傷付いた龍の体がさらに痛んだ。

「痛い………揺らすなルミ姉………」

「すぐ病院連れて行くから！！」

ルミ姉が慎重に龍を起こそうとする。

だが龍はその手を払いのけ汚れた鞆を拾って歩き出した。

「どこに……行く気？」

「病院なんか……行つてられっか……ルミ姉には関係ないだろ……」

痛んだ足を引きずりながら龍は歩いていく。

血と泥が龍の端正な顔と制服を汚し、どう控え目にみても無事とは言い難い。

だがルミ姉は邪険にされてもお構いなしに後ろから龍に抱き付いた。

「お願い……だから……言う事聞いてよ……！！」

龍には背中越しにルミ姉の必死さが伝わってくる。

心なしかルミ姉は震え、しゃくりあげているようにも思える。

あつたかい……

激しいリンチは龍の体と心を痛めたが、今ルミ姉の体温はその全てを忘れ去ることが出来る……

「……分かった……だけど病院は……なしだ……ルミ姉ン家じゃないと……いやだ……」

ルミ姉を振り解き一人歩き出す龍を、ルミ姉はオドオドしながらついていった。

「イテエ……」

「我慢しなさい龍。」

擦傷した箇所には消毒液を塗りながらルミ姉は言う。

どうやら見た目ほど大した怪我をしたわけでもなく、殆どが打撲によるものだった。

それでも青あざやたんこぶ、擦り傷などが多いため治るにはかなりの時間を要するだろう。

「凄い怪我……もうやめてよ龍。こんなん続けてたらいつか死んじやうよ……?」

「ウルセエ……アイツ等から先に仕掛けたんだ……俺で終われるか……」

治療の終わった龍の顔には包帯や絆創膏が施され、なんとも痛々しい伊達男になっていた。

「アイツ等……絶対エにトバす……ブツ殺してやる。」

「なんで……ねえ？何でケンカなんかするの……？」

「さあな……でも俺等は……少なくとも俺はケンカはやる気じゃあなかったよ……」

龍はポケットに入っていたタバコに火を着けるが、それはルミ姉に取られてしまった。

タバコを挟んでいた二本の指を見つめながら龍は話の続きを語る。

「……でもよ、向こうがやる気で、しかもここまでやりやがったんだ……やりかえさねエワケにはいかねエンだよ……。」

「メンツの問題？」

「メンツの問題だ。」

龍はボロボロに汚れた鞆から弁当箱を取り出した。
だがそれは踏まれ、蹴られたせいで中身は散乱し、弁当箱も砕けていた。

「……よし、十分だ。アイツ等マジで潰してやる……カチキレたぜ俺アよオ……戦争だ……！！」

フルボッコ（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

み「ダダンダダン」

サ「ターミネーター!!」

み「正解、次ね。ダダン、ダダン……ダダダダ……」

サ「ジョーズ!!」

み「正解。じゃ次。タタタタタタタ、タタタタタタ
タタタタタ」

サ「インディジョーンズ……?」

み「正解。次、ウララウララウラウラ」

サ「……ウ、う……ウラ?あ!?!山本リンダの狙い撃ち!!」

み「正解。」

サ「なんでここにきて歌?しかも日本の。」

み「ま、致し方ない。次……タタタ、タタタ、タタタ、
タタタ、タタタ、タタタ、タタタ」

サ「……わからない。」

み「答えになってないな。サリー。ヒントはボクサーだ。」

サ「後は読者に引き継ごう。」

まあ分かったら分かったで

ボブ・マンソン

「健……ちょっといいかしら？」

「ルミ姉……何のよう？」

その後、龍が家に帰った為遅刻して登校したルミ姉は学校にいた健を呼び出した。

「俺ちゃんと学校来てンぞ？生徒会長にしょっぱかれる理由はないけど。」

「いいから、ちょっと付き合ってよ。」

ルミ姉が真剣な顔つきで健に言ったため、健も口を紡ぎ黙って席を立つ。

「おー健、まさか告白か！？」

「ちげエよ。ちょっと行ってくるワ。」

健はジョットの冷やかに笑いながら返し、ルミ姉の後ろを付いていった。

「で、どこまで行くンだよ。そんなに人に聞かれない話？」

ルミ姉は黙って歩き続けやがて人気のない階段の踊場まで来ると足を止めた。

「健……私今日遅刻したんだけどーという理由か知ってる？」

「うんにゃ、知らね。」

あの真面目なルミ姉が遅刻とは珍しいな、と思いつつもおどけた調子でルミ姉の返答を待つ。

「……健……今日龍が来てないの……知ってる？」

「……知らねエな……。」

その言葉で急に健の雰囲気が一変した。

口調も目つきも真剣になり、恐怖すら感じ取れる。

そしてルミ姉は話した。

今朝起きたことをありのまま、健に全てを打ち明かした。

「マジか……そりゃマジなんだなルミ姉……？」

「嘘言ってどうすんのよ。」

全てを話し終えたルミ姉はふうって息を吐いて健を見る。
健は冷静を装っているが、小さい頃から幼馴染みをしてきたルミ姉

には健がキレているのがわかった。

「私としてはね健、こんなことはもう止めてほしいの。アナタにも龍にも……またあの頃みたい……戻りたいから……」

「その考えはルミ姉、大いなる無駄って感じたな。」

健がタバコに火を着けて一服するも、丁度階段を通りかかった教師がいたため慌ててその火を消した。

「つまり、このケンカは多分終わらねエよ。やられたらやり返す……永遠のイタチごっこだ。」

「セーンプイ！ちよつといいつすかア！？」

と、突然踊場の上から声がする。

健とルミ姉が声のした方を見ると黒人の少年と歯がない、ガラの悪い少年がいた。

「誰だお前ら？」

健は見たことのない新顔に尋ねる。

見た感じは不良のようだが、健が知らない不良となると新しく来た奴以外には考えられない。

「どうも〜ピカピカの一年生の『マンソン』です〜。」

歯のない一年坊が階段を下りながら自己紹介をした。

「で……俺が『暴武』だ……。」

マンソンの後ろからはボブと名乗る威圧感のある黒人が付いてくる。

健は二人の名を聞いてピクツと、僅かに反応を示した。

（コイツ等が……今年のルーキーの四人の内の二人か……）

「何の用だ一年坊？」

「わかってンでしょゝアンタ潰しにきたンだよゝ。」

マンソンはケタケタと笑いながら健に近付いていった。

歯がないように見えたが、それはどうやら歯が小さく溶けていたために無いように見えたのだ。

「お前……マンソンだっけ……？シンナーやってンよな？」

「それがなんだよ！？言っつつけどよ、説教ならもう聞き飽きてンぞ！？」

「いやちげエよ。良かったなゝお前これなら歯が吹っ飛んでも気になくていいぞ。惜しくねエだろ？」

健は右手に力を込め拳を握り、マンソンの顎にこれでもかというくらいのアッパーを入れる。

「ぐべっ！ー！」

マンソンの体は宙を舞い口くな受け身も取れぬまま踊場の床に叩きつけられた。

「へ、歯がないだけに話になんねエなこりゃ。」

「な……！？ワンパン！？」

一撃でやられたマンソンを見てボブは驚きを隠せないでいた。シンナーで溶けた歯の何本かは抜け落ち、血の海の中で鈍く白い光を放っている。

「テメエ……！！」

一手遅れてボブが動き、健に襲いかかる。だが健はボブの手を掴むと一気にひっくり返し力の有り様を見せ付けた。

「オメエ俺のあだ名知らねエのか？レックスだぞ？地上最強の肉食獣だぞ？」

「ギヤアアア！！テ、テメエバケモンか！！」

「だからレックスだつつつてンだろ。」

健は握っていたボブの手を離してすぐさまボブの体にダッキングし、そのまま持ち上げて顔から床に叩きつけた。

「ドラァー！！」

「ゴハッ！！」

ボブの夥しい鼻血は階段の踊り場を血で染めあげ、ボブ自身もあまりの激痛にただ声を押し殺して鼻を押さえていた。

「まあ精々精進するこつたな。これでテメエ等は俺の下だ。」

圧倒的な格差を見せ付けた健は事の顛末を見ていたルミ姉のほうを見る。

「見たかルミ姉……終わるにはこーいう風にどちらかが潰れなきゃ……終わンねエよ。」

それだけ言い残し健は階段を上っていった。

「おゝ健おかえり。どうだった？」

「ンなことよりもよオオゝジョット、裕二は居るか？」

「来てるけど？」

ジョットは背中越しに親指で裕二を指差す。

そこには包帯を巻いた、新しく傷を作った裕二がいた。

「裕二……テメエわかってンよな？」

「何がだよ？」

「とばけんな！！テメエまた龍に手エ出したンだろ！？いい加減殺すぞテメエ！！」

健は裕二の胸倉を掴み、椅子や机を薙払って床に叩き付ける。

「マジで一回血イ見せてやろうかつ！？あゝあ！？」

裕二の上にのし掛かり腕を振りかぶるが、その腕はジヨットによって止められる。

「ンだア？離せやジヨット。」

「離すかよ、オメエどうかしてンぞ？確かに先に手エ出した裕二が悪いかもしンねエけど、やられっぱじゃ裕二だけじゃなくて俺らも顔立たねエだろ！！ちったあ落ち着け！！」

ジヨットのもつともな言い分に健は黙り込んだ。
そして腕を振り解き、のし掛かっていた裕二から退くと自分の席に付いた。

クラスメートは突然起きたケンカに度肝を抜かれただけ見守るしかない。

「…………分かったよ。悪かった。」

少し落ち着いていた、それでもまだ煮え切らない健は一言だけ謝った。

「そいやさっき一年が二人お前ンとこに来たぞ？」

「ああ、そいつらなら潰した。」

「早いな。」

「まあな。」

ジヨットの誉め言葉に健は口数少なく答えた。

今健は思った。

もしこのまま龍と戦い続け示しがつかなくなるなら、自分が龍を潰すしかない。

勿論そんなことはしたくない。

だが自分が頭である以上、軍団を任されている以上頭が動かなければならなくなるのだ。

「やるしかねエンか……メンドクセエ……」

ボブ・マンソン（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

み「前の答えはロッキーでした」

サ「なんとなく分かってました」

み「毎回毎回後書きを書いていてネタがなくなり作者もヘキヘキしてます」

サ「後書きなど無駄無駄無駄アツ!!」

み「だから無駄使いコーナーっていうんだけどね。あえてノータッチでいきます。」

サ「往年のDIO様の真似です。」

み「はいまああえてノータッチでいきます」

サ「ところでここにきてバトルが出てきて作者もバトルを書いているほうが書きやすいとの声がありました。作者から」

み「なんかキャラ生き生きしてますもんね」

サ「これもまた青春なんだよね」

み「とても幸せ々なハズなのに、何だか、何でか、涙が出

くるよ」

サ「あゝああゝ僕はあゝ何かあゝ、やらかしてみたい」

みサ「そんなひとときを青春時代と呼ぶのだろお」

熱持ってんだよ(前書き)

短めです

熱持ってんだよ

「おう美羽ちゃん。」

その日の夜、龍の容態が心配だった健は龍の家へと赴いた。

「あ……健くん……」

心なしか元気のなさそうな美羽。
声のトーンが低いのが感じ取れる。

「龍……居る？」

「居るけど……部屋から出て来ない。」

「……上がってもいいかな？」

「いいよ……。」

美羽は健を相変わらず低いトーンで喋り続ける。

家の中は殆ど電気が着いておらず、龍のお母さんはいないようだ。

「龍、俺だ入るぞ。」

龍の部屋を開けた健の目に飛び込んできたのは真っ暗な部屋だった。

電気を点けず、真っ暗な部屋の中で龍の気配だけがする。

「電気点けるぞ。」

手探りで壁にあるスイッチを探し部屋の明かりを点ける。

明るくなった部屋のベッドに、龍が背を向けて寝ていた。

「龍……大丈夫か？」

健が声をかけるとのっそりとした動きで龍が体を起こした。

パンツ一枚で寝ていた龍は体が露わになり、至る所に青あざができ、包帯が巻かれていた。

「……顔が……熱チイ……。」

「まあ熱持ってンからな。」

ベッドから降りた龍は部屋の時計を見た後体をゆっくりと伸ばし、タバコをくわえる。

ライターを捜していると健が自分のジッポで龍のタバコに火を着けた。

「……忍びねエな。」

「構わんよ。」

二人で笑い合い、健は買ってきたばかりの凍ったアクエリアスを差し出す。

「あゝ悪いな……ヤツベ気持ちい。」

「やっぱ龍キレてる?」

「当たり前だろ。」

龍がアクエリアスを顔に当て冷やしながら答える。

「じゃあ……闘り合うしかねえな。」

「そうなるな。」

別段闘り合う事には何の躊躇いもない龍を見て健は少し驚いたが、これが龍だということに納得はした。

「言っとつけど俺はまだ負けた訳じゃねえからな。オメエに負けたら負けを認めてやんよ。」

「じゃあ俺が勝ったら龍、俺の下に着け。俺はデメエが来るのを待ってっからよ。」

「はっ!!じょーとーじょーとー!!っうわけで、開戦ってことでいいよな?」

「そうなるな。」

龍と健はお互いのタバコの先を擦り付け合い火を消す。
これが二人の開戦の合図であった。

この後傷が治る二週間、龍が学校にくることは無かったが龍が怪我をした一週間後、龍をフクロにした裕二を含む十三人が病院送りにされた。

熱持ってんだよ(後書き)

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

み「短ッ!？」

サ「まあ繋ぎみたいなもんですから。作者はたった今からテストですから後書き無駄使いコーナー終了です」

み「短ッ!？」

ムラマサ・エリー

龍が怪我をしてから二週間程経った日……

すっかり傷の完治した龍はタバコをふかしながら久々に学校へと登校している。

また後ろから襲われないか、気を配り警戒しながら登校するもそれは杞憂に終わり、無事学校へと辿り着く事が出来た。

「おはよう龍。」

「ああルミ姉……ハヨ……。」

基本的に龍はテンションが低い。
だが朝と言うことでさらにそのテンションは落ちていた。

「傷治ったんだ。」

「まあお陰様で大体ね。」

龍はニコツと笑いだした箱で靴を履き替える。

ルミ姉も龍の笑顔に釣られてニコリと微笑んだ。

これで龍も……大人しくなってくれるかもしれない……

ルミ姉がそんな淡い期待を抱いていると目の前に二人の生徒が現れ

た。

「よう龍。」

「よう健。」

健と、その右腕のジョットである。

龍と健はお互い挨拶だけをし、龍は健の横を通り過ぎた。

「やっと……来やがったか。後はいつでも来な。相手してやる。」

健がすれ違いざまにそう龍に囁いた。

龍はと言つと振り返らず片手をひらひらと扇いで返すだけであつた。

「おい健、いいのかよ、今やらなくて。」

「どうせやつても勝ちは見えてんだ。ならアイツのタイミングでやらしてやるーぜ。」

健はそのまま龍とは反対方向の階段を降りていった。

「やっぱり、まだ諦めてなかったんだ……」

「は……??……ああ健のことか。当たり前だ。俺はアイツを潰すつつつたんだぜ。まあもしもやめさせたかったら腕づくで無理矢理にでも止めさせるこつた。」

そう。龍は諦めてはいない。

ただ、今まだやらないのは決定的な戦力の差があるからだ。まずは健の軍団に対抗できるような軍団を持たなければならない。

「先輩、ちよつといいス力？」

龍がこれからの事を思案していると、不意に声を掛けられた。

「誰だ……？」

「誰だ……って、俺はアンタのこと知ってンぜ。的場龍だろ？」

目の前にいるのは二人の生徒だった。

龍のことを先輩と呼んだ辺り、一年坊だろう。

ただ一人はベビーフェイスで背が小さいのに対し、もう一人はカッコイイ、そして背が高いという不釣り合いなコンビであった。

「俺中村正樹つつうンスヨ。通常ムラマサね。でこっちのデカいのがエリー。実はコイツの方が先輩に用があるつつうンスヨ。」

エリーと呼ばれたデカい一年が前に出てくる。

だが改めて見てやはりデカい。

並ぶと龍より頭三つほど違う。

「なんの用だジャイアントルーキー？」

「アンタさあ、あの東堂と闘り合ったんだよねエ？」

「負けたけどな。」

龍は見上げながらエリーと会話をする。

「強いね。あ、そんなことよりもアンタさあ、顔力ワイイよね。」

「だから？」

「俺とケンカして俺が勝ったらさあ、ヤラせてよ。」

エリーがいきなり爆弾発言をしたため龍は思わず一歩引いてしまった。

「デメエ……ホモかよ、その顔で。」

「じゃ先輩、ちょっと一目つかないとこ行こっか。」

エリーは龍の肩を掴み、一緒に歩きだそうとする。
だが龍はその場から動く気配はなかった。

「一目つかないとこ？アホか。ヤンなら今ここでやりゃあいいだろ。
つかメンドイからさ、二人一緒に来いよ。」

「おー言っただな？言っただな？勝ったら3Pだぜ！！」

「いや俺はいいヨ。ホモじゃねエし。」

かははつと笑うムラマサとそれに釣られて笑うエリー。
だが龍はその隙に肘打ちでエリーの鳩尾を強打し、肩に回された手

を掴んでエリーを背負い投げする。

「グハッ!!」

「えッ!? ええ!？」

突然の攻撃に慌てふためくムラマサを横目に、龍は倒れたエリーに追撃で横腹に鋭い蹴りを三発、叩き込み気絶させた。

「次来いや。」

「舐めんなチビイ!!」

ムラマサはボクシングのガードを上げ、龍との距離を慎重に詰める。

（アレ……?）

気付けばムラマサは倒れんとしている所だった。
膝をつき、そのあとゆっくりと重力に従って前のめりに床に近付いていく。

- - ボクシングをやっていたムラマサの動体視力がよも見誤るわけはなく、ムラマサの記憶が正しければ間違い無くムラマサは……
もっとも攻撃を喰らった後に気付いたわけだが……

（何で……ジャブより後ろ回し蹴りのが……早いんだヨ……？）

ムラマサは揺れ行く視界の中、そんな事を思いながら床に倒れ込んだ。

「オラ一年坊、テメエ等の負けだ。……ルールは分かってんな？これでテメエ等二人とも俺の下だからな？」

「強いナ……分かったヨ……アンタの下に着ク……。」

立ち上がれないムラマサがこんな怪物にかなう訳がなく、素直に了承した。

「じゃあ今日授業終わったら俺ンとこに来い。遅れンなよ。」

龍は鞆を手に取りまた歩き出した。

「龍……あなたあの二人を下に着けたってことは……。」

「ア、居たンだルミ姉。そーだよ……チーム軍団作るンだ。健のチーム軍団潰す為にな……。」

しれっとした態度で龍はそう言い放った。

ムラマサ・エリー（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

み「まあなんだかんだで十話でし」

サ「すごいね放置されるかと思いきやもう十話とか」

み「頑張った頑張った。」

サ「如月さんの登場はいつなんでしょうね？」

み「彼女出るんですか？」

サ「らしいです。」

み「我々の出番はなくて、彼女は出ると？」

サ「なんか腹立ってきましたね。」

み「歌、歌いますか？」

サ「歌わない」

ロッキー

誰もいなくなつた静かな教室に西日が差し込んだ。

その教室の一角で、龍がケータイをいじりながら人を待っている。

「チワッス。」

「来たか。」

「先輩が来いッつったんじゃないスカ。」

ムラマサが口を尖らせて文句を言う。

「で、俺ら呼んで一体何すンすか？」

「ん〜？クク……面白い事すンだよ。」

龍は顔の前で手を絡ませ、ニタリと笑う。

面白いこと、その言葉にピクリと反応した二人だが内容を聞くと一気にテンションが変わった。

「江波中のロッキーを潰す。」

「マジッスカ!？」

二人が驚くのも無理がなかった。

江波中のロッキーこと等々力は二年にして既に江波中の制覇をし、

40人の軍団の頭だからだ。

当然二人にもロッキーの凄さは分かる。

「何だよオメエ等なに驚いてんだよ。つかロッキーってんなに強エンか？」

「強いっすよ。」

「じゃあやっぱ潰すしかねエなアア？今から行くぞ。」

「今から！？」

突拍子もない提案に、終始驚くばかりのムラマサとエリーなどお構い無しに龍は席を立った。

「早く行くぞ。今日中にケリ付けたいからな。」

「分かりました。」

「オス。」

渋々ながら、しかしどこか楽しそうな表情を浮かべ二人は龍の後を着いていった。

江波中は龍達のいる中学、紅楠中とは近くそれ故にいざこざが耐えない。橋一つ挟んだ所にある両者は、今最も対立している学校と言

えるのだ。

「先輩、分かりましたよロッキーの居場所。」

エリーがボコツた江波中のヤンキーを引きずりながら龍に言う。

「コイツが言うには今ロッキーはカラオケにいるそうです。」

エリーがそのヤンキーを龍の前に放り投げた。

ヤンキーはベンチに座ってタバコをふかす龍を見て、ヒツ……と小さな叫び声を上げた。

「おうテメエその話しマジなんだろうな？フカシこいてたらトバスぞ？」

「ウ、ウソじゃねエよ！！あいつはいつもヒマさえありゃあカラオケ行くんだ！！今日もカラオケ行くなって言ってたし！！」

「行くンスカ？先輩。」

龍は自分の前で震えながらロッキーの居場所を吐露する哀れなヤンキースを見た。

この態度なら嘘は吐いてないだろう。

「行くぞ。カラオケなら都合がいい。叫び声聞こえねエからな。」

タバコを地面にポイ捨てし、踏んで消した龍はヤンキーを立たせて先頭を歩かせた。

「案内しろ。」

龍はそう言つともう一本、タバコに火を付ける。

「オラ早く歩けよデメエ!!」

ビクビクとしながらこちらを見るヤンキーにムラマサが蹴りを入れる。

(根性ねエな……大丈夫かよ江波中……。)

そんな事を思いつつ、龍とムラマサとエリーはヤンキーの後を着いていった。

「おいまだカヨ!!いい加減疲れたツつうノ!!」

「あ、ああもう着いたよ。ここだ。ここの14号室にいるって言うた。」

そこはどこにでもある極普通のカラオケ。

三人は中に入り、受付の人に『14号室の奴らのツレです』と言ってすんなりと14号室へと向かった。

「なんかサア、ワクワクすんよなエリー。」

「俺殴りこみとか初めてだよ。」

「あ……ここだここ、14号室。」

龍は14号室の前で立ち止まり扉を開ける。

中は少し暗く計15人程の生徒が座っていて中には女が2、3人紛れていたが、全員龍達を見ている。

「なんだお前ら。」

「つうか誰だよ。」

「結構イケてンじゃん。」

中にいた人物は口々にそう龍達に向ける。

歌の途中だったためか、大音量の音響が部屋に響いていた。

「女は邪魔だ。部屋から出てけ。」

龍が部屋を見渡しながらそう言い放つ。

「ンだデメエ等イキナリ!!」

「ヤメロ。」

ひとりのヤンキーがキレかったが、中心に座っていた人物に制止され、大人しく席に戻る。

「女は出てけ。」

「えゝ!!」

「出て行って。」

不満タラタラに、各々が文句を言いながらも大人しく部屋を後にしていく。

「いやややゝ悪いねエ女の子たち。」

おどけた調子のムラマサが退室していく女子に声を掛けていく。そして三人は女子の入れ違いで部屋に入っていく、部屋の戸を閉めた。

「何の用だ？オメエ等、江波中^{みうち}じゃねエだろ？」

先ほどヤンキーを止めたこいつは多分ロッキーだろう。

明らかに雰囲気が違う。

素直に女子を部屋から退室させたのも、ケンカになるからそれに巻き込ませないようにさせたのだ。

（コイツ……頭が切れるな。）

龍はそう思い、テーブルの上に置いてあったマイクを掴みスイッチを入れる。

『あゝ、あゝ、お集まりの江波中諸君、俺の名前は『ドラゴン』だ。よく覚えとけ。で、突然だけど今からお前等をトバします。血い見たくなかったら素直に俺の下に付け。下に付きたくないならお前等を潰して下に付かせる。返答はいかに？』

歌の終わったカラオケボックスでは採点結果が表示された。

ロッキーはもう一つのマイクを手に取りスイッチを入れた。

『アホかテメエ等。ンな条件飲むワキヤねエだろ。』

ロッキーは次の曲が始まると歌の音量を上げる。

流れた曲はガンマレイの『LUST FOR LIFE』。
激しく早いテンポのノリの曲である。

『潰せ。』

曲の始まりと共に、江波中のヤンキーが龍たちに襲いかかった。

「しゃあ来いやアア！！」

「ハッハハアハハア！！ブツ殺したるわ！！」

ムラマサとエリーがいきり立ち、江波中のヤンキーを迎撃する。元々個室とはいえ大人数で通された部屋なので広さは十分にあるが、ケンカをするには少し狭い。

それでもムラマサとエリーには十分叩き潰す広さだった。

「シャラアアアア！！」

ムラマサはお得意のボクシングで敵をドンドンと打ち倒していく。

一方のエリーはと言うと。

「ひゅー!!」

相手の胸倉を掴み、一人一人床に叩きつけていく。

「なるほど、エリーは柔道が得意か……。」

路上格闘技において、柔道ほど有利な格闘技はない。

何故ならば掴むべき『衣服』はほぼ全員来ているからだ。
なおかつ自分にハンデは多くない。

「さすが。さて、残るはテメエだ。ロッキー。」

「チツ……カス野郎が……。」

流れ出る大音量の歌に加え、江波中の奴らの叫び声がボックス内に響き渡る。

「ナメンなよドラゴン!!」

「相手してやんよロッキーちゃん。」

ロッキーが手にしたマイクを龍に投げ、龍はそのマイクのせいで思わず顔を背けてしまった。

「ッシャアアア!! スキだらけだぜドラゴンよオオオ!!」

膝蹴りが鳩尾に入り、龍はその場にうずくまった。

「ゴホッ……！！テメエ……ロツ……キー！！」

「つうかワケわかんねエよテメエ。いきなりケンカ売ってきてよ。」

「ワケわかんねエのはテメエだよ……ロツキー……！！」

「あ？」

うずくまる龍を見下ろすロツキーは眉を寄せて怒りを露わにした。部屋は暴れ狂うムラマサとエリー、そして江波中の奴らでひしめき合い、流れ出る歌と怒声で騒音に満ちていた。

「ロツキーが蹴り技使ってンじゃあ……ねエよ。ロツキーならボツクス作って戦うんだろ……？『エイドリアーン！！』つつつてよ？」

「て、テメエッ……！！」

逆上したロツキーが、足を振り上げ龍の頭を踏みつぶさんとしている。

だが龍はそのスキを逃さなかった。

一本足になったロツキーの足に龍の水面蹴りが放たれ、ロツキーは尻餅をつく。

「な……！！？」

「オラアアアッ！！」

龍の持つマイクがロッキーの頭に振り降ろされた。

「グア！？」

スイッチを切つてなかった為、頭を殴った反響音が部屋中に響いた。それでもこの部屋に響き渡る声に比べれば小さなものだが。

「グアア……！！イテエ！！テメエ……クソ、なんで俺にこんなことを！！」

「やられる覚悟で頭張つてンだろテメエ！！腹くくれや！！」

ロッキーの胸倉を両手で掴み引き上げて顔面に一発、パンチを入れる。

「ガハッ！！」

「ウオオオ………ルアアア！！」

追撃、更に重いストレートが心中（鼻のすぐ下にある人体の急所）に一閃を描いて叩き込まれ、ロッキーは壁まで吹っ飛び叩きつけられた。

それでも龍の攻撃は終わらない。
終わる筈がない。

「シャラシャラシャラシャラシャラシャラシャラ……シャアルアアアッ！！」

反撃はおろか、避けるもクソもない怒涛のラッシュがロッキーに叩き込まれていく。

早く、そして重いストレート。

「ガブ……………ク……………」

「もうイッツパアツ!!」

最後の攻撃がロッキーの顎にアッパーとして放たれた。

ロッキーは気を失い、流血しながらフラフラの状態で前のめりに倒れ込む。

「ハア…………ハア……………ンク…………ハアアア……………!!」

さすがの龍もあれだけ息もつがぬ攻撃を仕掛けたせいで息が上がっていた。

「終わったンス力先輩？」

「こっちも終わりました。」

いつの間にか静かになったボックス内にはムラマサとエリーにやられた江波中の奴らが全員倒れていた。

もはや立ち上がることも出来ないだろう。

「オメエ等…………無事か？」

「ちょっと貰いましたがまあ大丈夫ツスヨ。」

ムラマサが鼻血を拭って笑った。

龍はマイクを拾うとポンポンと先っぱを叩き、壊れていないか確認をする。

「ン……壊れてないな……。」

確かな反響音がしたので壊れてはいないだろう。

龍は大きく息を吸ってマイクを口元に近付けて叫んだ。

『江波中制覇したぞシャルアアアアアッ！！』

と同時に44点の採点結果が表示された。

ロッキー（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

サ「こんにちは死ぬなら井戸の中へ」

み「何サラツと怪しい勧誘を……」

サ「まあ、そーいうのはいいから、そろそろ始まるぞ。いよいよ来るのだ」

み「自分から振っておいて………で、なにが始まるの？」

サ「作者の最後の夏の大会。最後の青春が、泣いても笑っても最後の高3の夏が始まる」

み「あゝ長いようで短かった二年半でしたね」

サ「そうです。負けたら泣きますよ。主に作者が」

み「でも本人は早く引退したいという気もあるようですが？」

サ「半々らしいですね。」

み「でもやっぱりやりたい気持ちもあると」

サ「どっちゃねん」

み「さあ？」

はい。作者のロード14 / 14です

仲間はいいもんですよ、悔いのないよう頑張らな！！

ドラゴンくん(前書き)

ガールズハントもよろしく

ドラゴンくん

「……………ん……………あ……………」

「お、先輩ロッキー起きましタヨ〜!!」

カラオケボックスでケンカし、龍たちは圧勝したあとカラオケで歌っていた。

龍にやられたロッキーは今やっと目を覚ましたところである。

『火をあげる♪HEY怒鳴れステリイオ♪HEY YO!!』

龍とエリーがノリノリで歌っていたが、ロッキーが気がついたので龍はロッキーの方へと歩み寄る。

「よう大将……………。気分はどうだ？」

「……………歯が折れたぜクソ……………」

「そりゃ悪かったなロッキー。」

謝る龍だが悪びれた様子は全くない。
だがそれが当たり前なのだ。

歯が折れるなどは、起きて当たり前である。

『で……勝手にお前等にケンカ売って悪いとは思ってンけど、ルールはわかってンよな？ つかエリー！！歌ウルセエよ！！消せ！！』

龍はマイクで拡張された声でエリーにそう言い放つ。

エリーは一度ビクツと体を震わせた後急いで中止ボタンを押した。

『さてと……わかるよな？ 負けたらその下につく。不良のルールだ。』

「『断る』 つつたら？」

『首縦に振るまでデメエをスコる。』

龍は笑みを浮かべ、ロッキーの顔を覗き込んだ。

ちなみに『スコる』とはボコるの更に上の表現法として、この地域の不良たちの間で使われている。

「デメエどこのモンだヨ？」

「紅楠中だ。」

どこの中学か聞かれた龍は素直に答えた。

「ククツ……まさかレックスじゃなくてデメエみたいな名前も知らねエ奴にやられるとはヨ……」

半ば自嘲気味に笑うロッキーは力無くうなだれ、ペツ……と血を吐いた。

「おいムラマサ、レックスって……誰のことだ？」

「安達健のことっスヨ。三年生を抑えて今最も紅楠中の頭に近い存在ッス。」

ムラマサの説明により明らかになった健の実態は、龍により確かな戦力差を思い知らせた。

やはり下克上には対抗しうる兵力が必要である。

「まあそのレックスよ……俺はそいつを潰すつもりなんだワ。だからよ、お前等江波中が必要でな。下につけ。」

「は……そーいうことかよ……。お断りだ。」

ロッキーは最後の方に力を込めて言い放った。

ムラマサとエリーが拳を握り武力行使に移ろうとすると、ロッキーは『ただ……』と言葉を続けた。

「下にはつかねエが、手は組んでやる。対抗したいンだろ？レックスによ？」

「ククツ……！！負けた分際でどの口がそう言ってやがんだか……。でもまあこの際四の五の言ったらンねエからな。それで手を打ってやるが勘違いするなよ？あくまで俺がそれで手を打ってやるだけだ。あんましゃしゃったことすると潰すからな。」

「ハツ……！！ナメンなドラゴン。」

龍はロッキーに手を差しだし、ロッキーはそれを掴むとグイッと引き上げられた。

多少のダメージが残っているせいか、足元がおぼつかないロッキーは壁にもたれかかる。

「とりあえずは……江波中制覇ですね。」

「まあ……とりあえずはそー言うことになるな……。」

タバコをくわえた龍にすぐさま火を着けながらエリーは言った。

的場龍、改め通称『ドラゴン』。
軍団構築、及び江波中制覇。

翌日から、的場龍ことドラゴンが三人で江波中を制覇したことが近隣の中学校に波紋を起こし、『ドラゴン』の名は一気に上がった。

それは『レックス』こと健のいる紅楠中も例外ではなく、噂は当然健の耳に入る。

「おう健……江波中が落ちた……あのロッキーはドラゴンに喰われたぞ。」

「……ジヨット、ドラゴンて誰だ？まさかあの『ドラゴン』か？」

騒がしい教室内、二人だけで話し合う健とジヨット。
だが誰も彼もが彼等の話を聞こうとはしない。

「オメエのツレの的場だ。あの野郎、マジで俺らとやるつもりっばいな。」

真剣な顔で話すジヨットだが、健にとってはさしたる問題ではないようで、相も変わらぬ調子で会話を進める。

「『龍』だから『ドラゴン』か。成る程ねエ……。ま、そんな気張るこたアないやな。どうせ江波中なんぞ数だけで気合いの入った奴なんていねエンだからよ。龍がそれでもやる気なら……潰すだけだ。」

その表情は確たる余裕があるようで、それは強者として、そして紅楠中の覇者としての余裕の表れでもあった。

「だがま、戦力が多いことつつうのに問題はねエからな……『エミリア』の奴らを引き込むか。」

「あいつらか……なんか本格的にやる気になってきたよな健……？」

「案外よ、俺らの敵は江波中とか港北中とかじゃあなくて龍なんかもな。」

皮肉を込めた笑みを浮かべ健は言う。

今、紅楠中で大きな戦争で起ころうとしている……。

それは頂点てっぺんを取るだとか、最強になりたいとかそーいう単純な理由よりも単純な、もっともってシンプルな理由。

『ケンカに勝ちたい。』

そんなシンプルな想いの、ドラムンレックス龍と健との巨大な戦争が始まった。

ドラゴンくん（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

み「負けました」

サ「完皮なきまでにね」

み「まあその話は置いて」

サ「ぶっちゃけどうでもいいですしね」

み「外伝もやつとケンカが起きてきましたね」

サ「ぶっちゃけそれなかったら外伝ではないけどね」

み「しかし本作『ガールズハント』ではヘタレやらギャグやらやつ
てる龍と健さんがね」

サ「まさか中学時代はこんなギャングキングみたいなあだ名でR・
16みたいな青春送ってたとは」

み「まるで作者の中学時代そっくりですな」

サ「作者は元不良なんですか？」

み「いえ普通に野球少年ですが？」

サ
「
.....
」

ここが戦争の中心

「つうことで……デスネ。」

ムラマサが龍、エリー、ロッキーの三人の前で話をし始めた。

ロッキー含めた江波中制覇から一週間後、大分傷の癒えたロッキーは龍とつるむようにはなった。

今は龍、ムラマサ、エリー、ロッキーの四人でマクドナルドの一角を陣取り話し込んでいる。

「不良界に晴れて入った先輩の為に僭越ながらワタクシ、ムラマサが不良の勢力図を説明します。」

そうムラマサが龍たちに告げ、龍を皮切りに拍手が起きる。

「まずは……近隣の中学校からでスネ。江崎が率いる港北中デス。」

ムラマサは紙とペンを取り出し、港北中を円で囲んだ。

「港北中は上下関係が厳しくて、でも一年、二年、三年とそれぞれ独立した軍団になってます。で、江崎は二年の頭でケンカにナイフを使う凶悪な奴らしいです。」

「ふん……」

さほど興味がないのか、龍は頬杖をつきテーブルの上に広げられた紙を見下ろしながら頷く。

「なあなあ、江崎つてのは結構イケメンかな？」

「知るわきゃねエだろエリー。カマ掘りたきゃ勝手にやってロヨ。」

「いいから次話せよ。」

ロッキーが続きを話すよう促す。

ムラマサは今度は紙に書かれた江波中を円で囲んだ。

「で、次がロッキー君とこの江波中デス。楠中とは一番敵対関係でしたが、今は先輩と組んでマス。」

「ンなこたア……知ってんだよ。次。」

「はい、次は……先輩と敵対している紅楠中のツスネ。」

紙の上に紅楠中と書かれ、それを同じように円で囲む。

「今紅楠中の最大の軍団……レックスの軍団には戦力が揃っていません。まずレックスの右腕『ジョット』。今は学校に来てませんがレックス軍団の中核『レミントン』。そして最近では一年生のルーキー『マンソン』と『暴武』。そして最後に『レックス』。マンソンも暴武もレックスに一発でやられたって噂デス。」

「化け物みたいだな。」

エリーが多少ウンザリしたような口調でそう呟いた。

「本物の化け物ならいるぜエリー。」

ムラマサは紅楠中、江波中、港北中と書かれた図式から少し離れた所に新しい図式を書いた。

「チーム『エミリア』を率いていた怪物……偶然にも先輩と同じ名を使っていたドラゴンこと島津龍兵。」「そいつなら俺も知ってる。」

今まで口数の少なかったロッキーが急に反応を示した。

「怪物東堂と互角以上に戦った、金髪のドラゴン。伝説のヤンキーだろ。」

ロッキーがムラマサの話を汲み取り、内容を話した。
ムラマサはコクリと頷く。

「今はもうやつはいまセンガ、ガービッジ、ストーム、エミリアはここらへんのギャングとしてパワーバランスを保っていマス。」
ガービッジに続き、紙に新たに書かれていくホーンテッドとエミリアの文字を龍はボンヤリと眺めていた。

そして同時に思った。

（なんでこんな……ゴチャゴチャした事しなきゃなんねェんだ？た

だのケンカだろ……」。

「最近では龍兵が抜けたためこの三つが均衡しあって争ってマスガ、今レックスがエミリアを取り込むンじゃねエかって噂されてマス。こんくらいっスネ、今の所は。」ペンにキャップをし、ムラマサは話を終えた。

「ゴクローサン。で、どうすんだドラゴン。」

「え……？何が？」

呆けていた龍はロッキーの声によって現実へと戻される。

「何がじゃねエよ。いつやるんだよレックスをヨ。」

「あ、ああ……どうするかな……。」

「打つ手ないなら……まずは兵隊増やすしかねエな。」

ギシツと背もたれに体重を乗せ、ロッキーは龍を見る。

「は？なんで兵隊なんだよ？軍団あんだろ？江波中のよ。」

「アホか？テメエらで潰したンだろーがよ。」

「あゝ……なんか悪イな。」

龍はいたたまれなくなり、ジュースのストローをかじった。

「なんか、的場先輩カワイイッスね。」

「ウルセエ。黙れエリー。」

脈絡なく唐突に言うエリーに机の下で蹴りを入れる。

龍は一度窓の外を見た後、何を思ったのか席から立ち上がる。

「もう今日はダリイからよ、俺アもう帰るワ。」

「そス力。失礼します!!」

「イテテ……お疲れ様っす。」

ムラマサとエリーが上目遣いで挨拶をし、ロッキーは無言で手を振る。

「ああロッキー……これは戦争だがヨ……間違っても健には手を出すな。これは俺と健のケンカなんだから。勝手なことすんなよ?」

龍はドスの利いた声で入念にロッキーにそう告げた。

ロッキーは笑いながら、しかし無言で手を振る。

それは了解の合図か、それとも忠告をあしらったのか。

龍には分からなかったが、何も言わずにマックを後にした。

「ロッキー君てサ、先輩と仲良イノ?」

「仲良しとは言えねエなあ。会ってまだ一週間だし。」

その上叩きのめされたのだ。

間違っても仲が良いとは言えないだろう。

ただ利害の一致で龍とロッキーは手を組んだのだから。

「お前等はなんでドラゴンの下に付いたンだよ？」

今度はロッキーが二人に質問をする。

「ン」……最初はエリーが先輩と闘り合うとか言い出シテ。」

「で、俺がケンカに負けてその場でリベンジかましたムラマサも負けたから下に付いたの。」

「逆らおうとはしなかったのかよ？」

黙って聞いていたロッキーはさらに質問を続ける。

「しなイヨ。先輩強いし、何よりカッコイイカラ。なんかあの人に付いていきたいカラサ。あの強さは憧れルネ。」

「俺は先輩がカワイイからかな。レックスも結構いいンけど、やっぱり先輩のがいいや。」

ムラマサとエリー、二人の各々の龍への慕いを聞いたロッキーは「ふうん……」と曖昧な返事だけ返す。

「なあ……今からちよつと動くンだけだよ……。ちよつと協力してくれや。」

「協力？」

「そ。もちろんこれはドラゴンの為にもなるんだ。」

何かを企んでいる笑みを浮かべロッキーは二人を見る。

だがエリーの方があまり乗り気ではなく、手をこまねいていた。

「でもさあ…… ロッキー君、先輩が勝手なことするなって……」

「関係ねエって。それにアイツの為なんだからよ。」

ロッキーはニヤリと悪どい笑みを浮かべ、携帯で仲間と連絡を取る。

ムラマサとエリーは黙ってそれを見ているしかなかった。

ここが戦争の中心（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

み「最近巷ではコメディクロスオーバーが流行っているらしい」

サ「出たかった？」

み「それは作者に言ってください」

サ「まだガルハンすら終わってないのにまだ他に小説抱えてるのに出来るわけがない」

み「だよ。でも噂じゃ作者はガルハンが終わるあかつきには何かやらかすらしい」

サ「極秘情報ですか？」

み「極秘情報ですな」

サ「ルドラも早く書き上げないとね」

み「仰るとおりですな」

ケンカ屋スパイク（前書き）

例のあの人が登場

ケンカ屋スパイク

ロッキーが何かしらの策略を練っているとはつゆ知らず、龍は当てもなく外を歩いていた。

そして考える。

もともとは龍と健のケンカ……だがロッキーや軍団など、自分でもワケが分からないままゴチャゴチャになっていく。

自分は健と闘り合えばいい……単純に、アイツと喧嘩がしたい。

その思いしかなかった。

別に軍団がどうなろうと知ったことではない。

だから龍は外に出て、一時でもそのしがらみから逃れたかったのだ。

「あ、龍……」

ふと背後から見知った声がし、振り向くとそこにはルミ姉が立っていた。

今は制服などではなく、動きやすそうな私服で身を包んでいる。

「ルミ姉……」

何故か龍は少しホツとしたような、それでも普通に見ればいつものポーカーフェイスから微妙に変わった程度の表情を浮かべた。

「ルミ姉……今一人か？」

「え？うんまあ一人だけど？」

龍はそっか……と頷くと少し間を置いてまた喋り出した。

「今からさ、ちょっと付き合ってくンない？」

少し照れたように、だがこれまたいつものポーカーフェイスを崩さずに言う。

長年幼なじみをやってきたルミ姉としてはその機微を読み取れており、龍からの誘いに戸惑いはしたものの首を縦に振った。

そして二人が行ったのは近くの喫茶店。

古めかしい雰囲気と静かな雰囲気が相まって隠れた名店として仰木の一角に佇んでいる。

「で、いきなり付き合ってくれてどういうこと？まさか本当に付き合っただけかい？」

ルミ姉は注文したクリームソーダのアイスクリームをつつきながら、上目遣いで龍を見る。

「いや、特にこれといった用は……ないな。」

上目遣いを気にも留めず龍はコーラを一口、ストローで吸い上げる。ルミ姉はからかうこともできないので、上目遣いを止めて背もたれにもたれかかった。

「でもただ無性に話したかっただけ。」

「私と？」

「普通の人と。」

淡々と進む会話に、若干ルミ姉は気まずさを感じた。

「あ………そいえば健とはどうなったの？」

「健とはまだ何もないよ。」

「何もないか………じゃあまだやっぱり引き返せるよ。今ならまだ間に合う。」

その言葉に、コーラをストローでかき回していた龍の手が止まった。

「しつけないルミ姉、もう引き返せないんだよ。俺と健のケンカだ」

けどよ、俺と健だけの問題じゃあなくなってきたんだ。」

「……………何があっても……………止められないの?」

急にルミ姉の声のトーンが落ちた。

いつもそうだ。

昔からルミ姉は龍と健といるときは唯我独尊で、持ち前の勝ち気な性格で二人の姉御として君臨していた。

だがいざ龍と健が本気の本気でキレたり、自分の力ではどうしようもなくなると途端に弱くなってしまう。

「もう……………無理だな。引き返せない。どちらかが潰れるまで終わらん。」

「……………わかった。じゃあさ、私が龍に付き合ってあげたんだから龍もちよっと付き合ってよ。」

俯き少し暗い顔を浮かべていたルミ姉だったが、パツと明るい表情を浮かべると席を立ち龍の手を掴む。

「いいけど、どこにだヨ?」

ルミ姉にされるがまま、立ち上がった龍は何も話さないルミ姉に素直に付いていく。

二人は会計を済ませ、夕暮れ時になった仰木の大通路に出た。

「なあって、どこに行くんだよ?」

「いいから付いてきてよ。」

人混みの中を掻き分けて進むルミ姉。

しかし龍の手をガッチリと握り締め離そうとはしない。
まるで逃げ出させないかのように、力強く龍の手を握り締める。

そして二人がたどり着いたのはゲーセンだった。

「何しにゲーセン？」

「一緒にプリクラ撮ろうかなと。」

その一言に龍はただ頭に疑問符を浮かべるだけであった。

なぜいきなりプリクラを撮る話になったのか？

なんの脈絡もなく、突拍子に案を出すのはルミ姉の十八番であるが、まさかあの空気でもここまで持つていくとはさすがに長年幼なじみとして連れ添った龍にも理解しがたいものであった。

「いえー!!！」

「いえー!!！」

だがやはりというべきか、龍はいざプリクラを撮るとなるといきなりノリが良くなりルミ姉と仲良く映る。

「何だかんだでノリいいじゃん龍。」

「うるせ……!!！」

プリクラを見て満足そうにほくそ笑むルミ姉に少し照れたように笑う龍。

端から見れば仲の良い美男美女の恋人同士に見えただろう。

この状況が続けばだが。

「イタッ。」

「おッ!？」

ハシャいで周りの注意を怠ったルミ姉はひとりの男性とぶつかった。

「あ……スイマセン。」

ぶつかった相手……高校生だろうか、身長がはるかに龍よりかデカい。

180近い体躯に赤いロングヘア！。

見た目は不良のようだが、龍や健とは違う雰囲気を感じさせた。

「いやいや大丈夫。キミがこれから付き合ってくれたらもう、チャラよチャラ。」

その男はぶつかってきたという理由をタテにルミ姉に近付こうとしていた。

確かにルミ姉は百人が百人、美女と答える程の美女と言える。

龍は何故か、ルミ姉がこんな男に触れられるのが堪らなく辛抱ならなくなり、とつさに手を掴んで自分の元へと引き寄せた。

「え？龍……？」

「ンだテメエは？」

男が龍を見下ろす形で睨み付け、龍はルミ姉を自分の背後に回して相手を睨む。

「誰だっていいだろーがヨ。アンタこそ俺らに構うなよ。」

「ハアアア？テメエから先に絡ンだんだろ？寝言言つてつと泣かすぞチビ！？」

確かにそう言われれば、ことの発端はルミ姉が引き起こした。

龍はチラリと背後に隠れているルミ姉を見る。

ルミ姉は心底悔いたような表情で声に出さずゴメンと謝る。

「どーしたンだよスパイク？」

「なんかあつたンか？」

そして『赤髪の不良』の背後にあるUFOキャッチャーの影から『赤髪の不良』をスパイクと呼ぶ、更に二人の不良が姿を現した。

「なんでもねエよ。ちつと絡まれてるだけだヨ。」

スパイクはまるで自分の方が弱者で、自分が今不良に絡まれている

と言っているような口調で仲間に告げる。

「ンだよ絡まれてンかよ？つうかスパイクが相手するまでもねェだろ？」

「俺らが潰してヤンよ。」

二人のヤンキーはずいっとスパイクの前に立ちふさがる。
龍など所詮はただのヤンキーと見なしたのだろう。

こんな二人にやられる龍ではないが、今自分は女連れであることが非常にマズい。

自分がやられる分にはいいが、ツレの女がやられるのは男として一番あつてはならない。

「ルミ姉……ここはルミ姉だけでも逃げろ……アイツ等は俺がやる……」

龍はひそひそと背後にいるルミ姉に逃げるよう指示を出す。

「でも龍……」

ただそれを素直に承諾するルミ姉ではない。

ましてや自分のせいでこんな事態になったのだからなおさらだろう。

「いいから行けよ……ルミ姉がいると邪魔なンだつて！！」

「ナアニくっちゃべってンだ？どちらにせよお前らが死刑になんのは決まってンだよ！！素直になれや。」

「行けよルミ姉!!」

「……ごめん!!」

気迫に圧されたルミ姉は振り返ることなく、一目散にゲームセンターの出口まで駆け出した。

「逃がすかよアマ!!」

直ぐにルミ姉を追いかけようと二人が動くが、それを龍が許すハズもなく脇を通り過ぎようとするひとりの肩を掴んで鳩尾にブローを叩き込んだ。

「ゴアッ!!」

「ッだこらテメエ!!」

「シャラア!!」

素早い動きで龍は跳躍し、まるで映画のような後ろ回し蹴りを二人目の顔面に叩き込む。

「グハッ!!」

床に倒れた相手の腹を踏みつけ、次なる相手……スパイクを睨み付ける。

「おいコラのつぼ、テメエの相手は俺だろーが!!調子に乗ってシカトコイてつと、ぶっ壊してスクラップにすんぞキモロンゲ!!」

「あ？テメエこそ誰に上等切ってんだ！？チビは呼びじゃねエんだヨ。泣かすぞコッパがヨ？」

「ンだとテメエ……頭刈り上げてやンゾ？」

「カスが、テメエこそ終わったゾ……？」

龍は踏みつけていた相手から足をどかし、蹴りを入れた後スパイクとの距離を縮める。

スパイクの方は言うところから始まるケンカに備えて髪を纏め上げていた。

そして龍が、スパイクが、互いの間合いに入り込んだ。

「ワビ入れンなら今の内だぜチビ？」

「せーぜー今ン内に吠えてろデクの棒。」

スパイクが龍を見下ろし、龍がスパイクを見上げる。

そして二人が攻撃に移るのはほぼ同時だった。

ケンカ屋スパイク（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

み「彼が出ましたね」

サ「出ましたな」

み「一応あれで龍たちと同じ年というから驚き」

サ「桃の木」

み「まだまだ全然彼のスペックがわからないのですが」

サ「チーム『ガービッジ』の頭で、バリ強って位ですね」

み「リアルにどっちが強いかな？」

サ「黙って読んでりゃその内わかるよ」

スパイクは飛焰様からお借りしたキャラです

あっちこっちで

「ぐっ……」

「がっ!!」

龍とスパイク、二人が同時によろめいた。

龍はわき腹を押さえて前のめりになり涎を垂らし、スパイクは鼻から鼻血を垂らしている。

（なんつー蹴りだよクソロンゲ……!!吐くかと思っただぜ……!!）

龍はうまく息の出来ない状態でスパイクを見る。

今の龍の状態はとても追撃をよけるようなコンディションではない。

（チビが……ンだよめちゃくちゃ速エパンチじゃんかよ……!!）

だが龍の拳は間違い無くスパイクの心中を捉えていたため、スパイクもヨロヨロとしながらUFOキャッチャーの機械に背を預ける。

「か………ハッ!!どうだロン毛……!!ハア……ハア……効いたろ……!？」

スパイクはもたれ掛かりながら、挑発してくる龍に無言で中指を立て、その指をクイクイと動かした。

「……上等……」

まだまだやる気のスパイクは無言で挑発しかえし、龍は腹を押さえていた状態から走り出した。

「シャッラア!!」

龍から繰り出された左拳をスパイクは片手で受け止める。

「テメエなかなか強エじゃんかよ。パンチも速エし。『ガービツジ』に入らねーか？」

「テメエが俺の下に着くんなら入ってやってもいいぜ？」

「テメエよ、そーいう冗談はいらねエンだよ。」

龍の拳はギリギリと押さえつけられたまま動かなかった。

いや、正確には動けないのだ。

180近くある恵まれた体躯を持つスパイクは力が強く、龍の力では拳はここでも動きそうにはない。

「ベッ……」

「うッ……!？」

均衡状態の中、スパイクは口の中に溜まっていた血を龍の目に吐き出し、怯んだ所に前蹴りを放って龍をふっ飛ばした。

(っ……………強エ……………)

「ハッハハア！！オラこいよチビィ！！」

スパイクは倒れ込んだ龍に追撃はしなかったが、勝てるという確信からか余裕を見せていた。

激痛と激昂が龍を支配する中、龍はゆっくりとスパイクを見上げる。

「かはッ……………はッ……………はッ……………、完璧火イ着いたぜ俺アよ……………マジでブッバラす！！」

確かに今の龍には手の余る相手かもしれないが、ブチギレれば話が変わってくる。

「お前ら何してンだ！！」

だが突如として現れ場の空気を壊したのはマッポだった。大方、店員が騒ぎを察知して連絡をしたのだろう。

「チッ……………マッポが、シラケたぜ。おいオメエ等いつまで寝てンだよ！！早く起きろ！！」

スパイクは仲間を叩き起こすとそのまま一気に散会して何を逃れた。

（……のクソチビ野郎……たかが一発のパンチが、まだ効いてやが
ンゼクソ……！！）

ふらつく体、龍の一撃は確実にスパイクの意識を彼方まで持ってい
く一撃だったが、スパイクは持ち前の頑強さでなんとかその意識を
保っていたのだ。

「俺も……退くか……」

ぼそりと呟き龍は自分を制止しようとする警官の脇をすり抜けて、
ゲーセンから脱出をした。

「あ、龍！！大丈夫……」

ルミ姉は外で龍が出て来るのを今か今かと窺っていたが、出て来た
龍に途端に手を掴まれる。

「ルミ姉！！逃げンぞ！！」

「え？ちょ！？」

「逃げンぞって！！いいから早く！！」

何がなんだかかわかない、事態が飲み込めていないルミ姉の手を握り
一気に駆け出した。

龍が後ろを伺うと視界にはいるのはルミ姉のみ。
どうやら追っては来ていないようだ。それでもニコチンに侵された
体で龍は走りつづけた。

「ちよっ……と、龍……」

「はぁ……ッ……ハア……！」

「龍……！！」

「アッ……？アア……。」

落ち着いた龍は汗だくになった額を拭い周りを見回す。

そこは大仰の大通りから少し離れた広場で、誰もいない。

ルミ姉を見ると同じ様に息を切らして膝に片手を突き龍を見ていた。

「龍……大丈夫？」

「はぁ……うっ……ちよつと……タンマ……」

先程のケンカで痛めつけられた体にムチ打って走り続けるのは龍に
とっては拷問に等しく、近くにあった茂みに胃の中の物を嘔吐した。

「大丈夫……？」

「うえっ……う……カハッ……！！ハア、大丈夫だ……。」

口の中に残った異物を全て吐き出し龍はタバコに火を付ける。

「ゴメンね……私が……プリ撮ろう……なん……て、言った……」

…から……!!」

ルミ姉は泣きじゃくりながら謝り、大粒の涙を流した。
鼻をすすり上げ嗚咽をもらし、ただゴメンねと龍に謝り続けた。

「……………」

何時もならば龍がタバコをふかしていたら怒鳴りつけるルミ姉も今は何も言わない。

だが龍はくわえていたタバコを地面に捨て、何を思ったのか泣きじやくるルミ姉を抱きしめた。

強く、強く、折れるのでないかと思うくらい強く。

「つく…………えぐつ…………龍…………？」

「悪いな、ルミ姉。」

耳元で囁くとルミ姉は体をビクッと反応させ、龍の体を強く抱きしめる。

「龍…………」

「……………」

龍は一言だけ囁いた後ルミ姉を引き剥がした。
キョトンとした表情で、ルミ姉は龍を見る。

「帰るワ。」

たったそれだけ手短にルミ姉に告げて龍はさつさと歩き出す。

「龍……あの、えっと……」

「今度プリくれな。」

振り返らず、ルミ姉に聞こえるか聞こえないかの声で呟いて龍は仰木の大通りの人混みの中に姿を消した。

一人残されたルミ姉は、先程撮った笑顔で映っている龍とのプリを見て必死に涙を堪えていた。

「……テメエら……誰に上等きつてんだ!？」

「誰に? テメエにだよレックス。」

誰も通りそうにない空き地で、レックスとジョットが40人あまりの不良に囲まれていた。

その制服はレックスのいる紅楠中に敵対する江波中のもので、中心には不良界の有名なロッキーまでいる。

「そうか……つうことはテメエら、死ぬ覚悟できてんだよね? いいよな? 手加減しねエぞ?」

「つう……ッ!」

ドスの聞いた声で脅す健に周りの奴らは怯え、引き気味になる。

「おうオメエら……引いてンのか？」

今度はロッキーの言葉に皆がびくりと体を強ばらせた。

「でもよ……マジで……コイツら……」

「関係ねエよ。……潰せ。」

ロッキーの一言で全員が健とジョットに襲い掛かった。

中には手には角材を持ったりするやつらもいる。

「どうするジョット？」

「一人一人ブチ殺す。確実に。」

怒号の飛び交う中、冷静な会話をしながら二人は制服の上着を脱ぐ。

「ウオラアアアアア！！」

総勢40人あまりの軍勢に、二人はなんのドーグを持たぬまま素手で突っ込んでいった。

あっちこっちで（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

み「それが、ていこくかげきだんなのですー!!」

サ「なんでオープニングにサクラ大戦？」

み「まあまあそれは置いといて。やっとスパイクとのケンカシーンになったね」

サ「飛焰様へ大変、ながらくおまんたせいたしましたー!!」

み「何故山本？」

サ「流して。海まで。」

み「スパイクってまだ出るのかな？」

サ「当たり前だのクラッカー。最後まででるわい。霊長類なめんな」

み「いやアンタ犬とのキメラやし。」

サ「アンタなんかネコベースのキメラじゃない。タメー!!」

み「地球に生まれてよかったー!!」

サ「やっぱり山本か」

如月シュンツー!! (前書き)

やっと彼の名前が出ました

如月シュンツ！！

その夜、的場龍は親友の安達健を前にして何も話すことが出来なかった。

目の前にいる健は顔中に痣を作り右目には眼帯を、体には包帯を巻いている。

「……………龍……………」

「なんだ……………」

「タバコ……………くれ……………」

龍は催促に無言でタバコを差し出し健は一本、マイルドセブンに火を着けた。

「ふう……………」

「健、何があつたんだ……………」

「大したことじゃねエよ。」

健は一言だけそう言う口を紡いでした。
どうやらこの怪我については頑なに話すのを拒んでおり、それが逆に龍に質問の拍車をかけていく。

「大したことねエ？じゃ転んでそーなったンかよ？嘔吐け、誰にやられたンだよ！？」

半分怒りが混じったような口調で健を問い詰める。

龍には倒すべき相手が誰かにやられたことよりも、親友がやられたことに腹を立てていた。

健はタバコを最後に大きく吹かすと灰皿に押し付けて消し、もう誤魔化すことは出来ないと思ったのか重い口を開いた。

「……ロッキーにやられたンだよ。」

「ッ！？」

龍は言葉を失った。

まさか、身内がやったのかとショックが体に重くのし掛かる。

「ジョットがな……病院送りにされたンだ……。40人位居たからよ、ハデにやられたンだワ……。」

クツクツと自嘲気味に笑う健はタバコをもう一本龍から貰い火を着けた。

「ロッキー……の野郎……」

龍は込み上げてくる怒りを抑え込むことが出来なかった。

あのクソ野郎は俺の命令を無視したところかあまつさえ健に手を拳

げやがった。

それが今龍の怒りの原因で、どうしてもロッキーのことが許せなかった。

「で、どーすんだ？今から闘るか？俺は構わねエが。」

「ザケンな。そこまで腐ってねエヨ。傷はどんくらいで治りそうなんだ？」

「まあ……俺は比較的打撲とかだからなあ………二週間位で治んだろ。」

龍がタバコを一本出しながら訊くと健はそう答えた。

「そうか……」

龍はタバコに火を着けると徐にそう呟いた。
心ここにあらずといったような感じであった。

だが突然何を思ったのか、龍はくわえていたタバコを自分の手にあてがえ、右手の甲に根性焼きを入れた。

「何やってんだ！？」

さすがの健も驚きを隠せないようで、慌てて龍の手からタバコを奪

う。

部屋には焦げた臭いが充満し、龍は齒を食いしばって痛みに耐えていた。

「何やってつか……？ワビ入れたンだよ……俺がロッキーを仲間にしたから……お前に……」

「アホかテメエ！！つかナメてンのか！？俺は潰されるのを覚悟で頭張ってンだ！！」

健のこの一言は、龍の混乱した頭にガツンと響いた。確かにそうだ、と龍は改めて思い知らされたのだ。

潰される覚悟で頭を張る……

龍がロッキーと闘う際に言った言葉。

今の行為は健への侮辱以外何でもない。

「龍……もうよ、軍団とかややこしい話はナシだ……。サシで勝負決めようや。元々俺とお前のケン力なンだからよ……？」

「お前がそれでいいならやってヤンよ。」

「バゝ力。まともにやっても勝っちまうだろ、俺がヨ？じゃあ俺はそろそろ帰るからよ、また明日……な。」

「……………ああ。」

健は痛みで軋む体に鞭打って立ち上がり、龍の部屋のドアを開け出て行った。

タバコをくわえながらベッドに背を預けていた龍はしばらくボーッと自室の天井を眺め、物思いにふける。

右手の甲に出来た真新しい火傷など気にも留めず、ただ天井とくゆれている煙草の煙を眺め、そしてふと思いつたように携帯を手に取り、電話をかけ始めた。

アドレスからロッキーの名を選び、ボタンを押して携帯を耳にあてがう。

『どーしたヨ?』

「おう ロッキーよ、今からさあ、公園来てくれよ。今からな。」

『ンだよいきなりメンデエよ。』

「いいから来いって。」

『あゝまあ分かったワ。ちょっと待っとけ。』

めんどくさそうにしつつも承諾したロッキーは電話を切り、龍も直ぐに支度を始める。

動きやすいプージャーに身を包んで、既に暗くなった外へと歩き出した。

「あ……そだ。」

公園へ向かう途中、急に何か思い出した龍はまた携帯を取り出して電話を掛け始めた。

だが今度の相手はロッキーではなく、一つ下のムラマサであった。

『はい、なンスカ先輩?』

二回のコールで電話に出たムラマサはいつもと変わらぬ口調で龍からの電話に答えていた。

「おうムラマサ。今からちいと公園に來い。エリーも連れてな。」

『ちよつ、今からツスカ!?』

「今からつつたろ。早く來いよ。わかつたな?」

『………分かりまシタ分かりましタヨ!!!今から行きますヨ。』

「おう。早く来い。」

そう言っただけ電話は切れてしまった。

龍は歩きながら話していたため、直ぐに公園へと辿り着いた。

そこは前に龍が裕二にフクロにされた公園で、龍には苦い思い出しかない。

「まだ来てねエ……か。」

当たり前のことだが、龍が一番公園に近いたため先にたどり着くのは道理である。

近くにあったブランコに座り龍はタバコに火を付けた。

五分後、最初にまずムラマサが姿を現した。

「チャス。」

「おう……」

スパアツと煙を吐いた龍は適当な長さまで吸った煙草を地面に落とした。

さらに五分後、エリーが息を切らせて姿を現し、隣ではムラマサがブランコで遊んでいた。

「スイマセン……！！ハア……ツカハア……ゼエ……ゼエ……ツ遅
れました……。」

「遅エよボケ。なんかイライラしてきちまったじゃねエか。」

ぶつくさいいながら龍は煙草の箱を見るがいかんせん、既に吸い尽
くした後で中には一本もない。

「まいいや。エリーお前タバコ持ってンよな？」

「いえ、俺もタバコ切れてンすよ。スイマセン……！」

「……ムラマサは？」

「俺タバコ吸わねエッス。」

ムラマサはブランコで半円を描くくらいの勢いを付けていた。
仕方がなく龍は先ほど捨てたタバコの吸い殻に火を着けて、僅かな
喫煙タイムへと洒落込んだ。

「なにお前シケモクなんか吸ってンの？」

ちようとタバコをくわえたところで龍の目の前にロッキーが姿を現
した。

態度も格好も、いつもとなんら変わりはない。

「で……俺を呼んだ理由は？」

「いやあゝ……お前なら分かってンよな？」

ニコニコと全く敵意のないような笑みを浮かべて龍はロッキーへと歩み寄った。

「は？わかんねーよ。早く要件言えつて。」

「あ、そおゝ？何トボケちゃってンだテメー。お前健に手エ出しだろ？フクロにしたらだろコラ。」

ニコニコの笑顔から一変し急に顔を険しくさせる龍。

ロッキーは今まで見たことのない顔を見て無意識の内に一步退いた。

「……だからなんだツツーンだ！？ア、アッ！？ホモかテメエはよ！？ツブしてなにが悪いンだチビ！！」

「おいテメ、ハゲコラア！！お前それ俺にぶっ殺される覚悟で言つてンだよなア！？」

「あの……とりあえず二人とも落ち着イテ……」

「「うるせエ！！だあってろ！！」」

一触即発状態にまでなった二人にはもはやムラマサの声など届いてはおらず、互いに火花を散らしていた。

「つうかテメエドラゴン、いつから俺ン指図するようになってやが

ンだア？あんな調子コイトつと埋めンぞ？あ？」

「テメエこそ弱エくせにデケエ面してンじゃねエチンカス野郎が。拳握るよりチンボ握ってた方がよっぽ様になってンぜ？」

龍の挑発の言葉にピクツとロッキーが反応を示した。

そして次の瞬間、ロッキーの左ジャブが龍を襲った。

龍は回転してそれを避けると、回転の勢いを利用した左裏拳をロッキーの鼻ツ面に叩き込んだ。

「ぶはっ！！！」

「おら立てよ。それとも腑抜けはもう一発でダウンか？」

ボタボタと流れ落ちる鼻血を両手で受け止めていたロッキーは鼻を押さえながらヨロヨロと弱々しく立ち上がる。

「ロッキーよ、俺ア言ったよな？健には手出さなつつてよ？」

「ンなもん知るかボケ……！！気に喰わなかったら潰すだけだろがアアッ！！！」

雄叫びと共にロッキーは龍の服を掴み、自分の下へと手繰り寄せる。

「死ね、ゴラアッ！！俺に、指図してンじゃねエエエエエ！！！」

「うるせエエエ！！！」

ロッキーが殴りかかろうとした瞬間、ロッキーと近距離になった龍

は顔面に強力なヘッドバッドを入れた。

「ベッ………！？」

メシヤリという生々しい音と振動が龍の頭を伝わり、先ほどとは比べものにならない位の夥しい程の鼻血がロッキーの鼻から溢れ出す。

「おいロッキー、テメエ……勘違いしてンじゃねエぞ？お前が健に手エ出したのは俺が仲間になったからだろ……？自分より強いやつと組めば、健に勝てると思ったから健に仕掛けたンだろ？俺や健より弱エくせにな、頭張った気で調子こいてンじゃあ……ねエぞゴラアアアア……！」

自制が利かなくなつたのか、龍は倒れて無抵抗になつたロッキーの腹や顔面にしこたま蹴りを叩き込む。
それはもはやケンカと呼べるような代物ではなく、ただただ一方的なリンチ。

「グボア……ヤ、ヤメ、ロ……もう……ヤメ……」

「なんとか言ってみろや、アア！？」

「先輩止めてくだサイ……！」

「これ以上やったらロッキーくん死んじゃうよ……！」

鬼気迫る龍の気迫に気圧されていた二人はふと我に返り、リンチを続ける龍を止めにかかった。

「離せテメエらアアア……肩持つつうンならテメエらから潰すぞ

「!?」

「落ち着いてくだサイ先輩!!俺らも乗ったンスヨ!!俺らも共犯なンスヨ!!」

「あッ?今なソつた?」

ムラマサの言葉に龍の動きがピタリと止まった。

「俺らも共犯なンスヨ。ロッキーくんの提案に俺らも乗ったンダ!!」

「……スイマセン!!でも、ドラゴンくんの力になればと思って……!!」

二人の必死さに、龍はロッキーにリンチを加えることを忘れていた。

「マジなんだな?フカシじゃねえンだよなテムエら?」

ドスの利いた声にムラマサとエリーの体は震えていた。

初めて経験する、純粹な恐怖。

二人の膝は笑い、唇は震え、体には今までにない緊張が走っている。

「マジ……………ッです。」

絞り出したかのような声でエリーはやったのことで龍の問いかけに答える。

「そうか……」

一言、力無くそう呟いた龍は二人を振り解いた。

助かったのか……？

二人の心には安堵が広がるがそれも束の間で、エリーの鳩尾には右フックが打ち込まれていた。

「ケハッ……！？」

「ガッカリだよ。」

龍はそう言って今度はムラマサの方へと向き直る。

エリーは腹を押さえ痛みに悶え苦しみながら公園の地面に這い蹲っていた。

「お前らどっちの下に着いてんだ？俺か？ロッキーか？」

「先輩……ッス……！！」

カチカチとムラマサの奥歯が鳴っている。

「じゃあなんで健に手エ出してんだコラァアッ！？」

「カハッ……！！」

ムラマサの鳩尾にも同じく右フックが打ち込まれた。

「ゴホ、ゴホッ！ー！ガッハッッ、カハッ！ー！」

「まあこれで許したるワ。おいロッキー、テメエもだ。今度弓引いたらその歯全部ブチ折っからな！ー！」

ロッキーはヨロヨロと立ち上がると、何も言わず恨めしそうな目で龍を一瞥し、公園を去っていった。

「おうムラマサ。」

「は……ハイ。なンスカ？」

「お前よ、スパイクって奴知ってるか？」

既に二人を許している龍の声はいつも通りの声。顔も先程のような残虐な顔付きではない。

「スパイク……！？有名ツスヨ！？多分今一番有名な奴ツス。本名は如月駿って言うンですけど、先輩とタメでもう180いつてる、赤髪でギャングチーム『ガービッジ』の頭デス。」

「あいつ、タメ……かよ。」

龍はそれを聞いて一度スパイク……如月駿の姿を思い出した。

「ケンカがメチャクチャ強いって聞きましたケド、あんま関わらない方がいいでスヨ？なんかあったンすか？」

「いや……なんもねエ。」

龍はそれだけ聞くとチッ……と舌打ちして空を見上げた。

深夜で暗くなつた空は雲がかかっている。今夜は星が見えそうにない。

「如月駿……ね……」

龍は二人に聞こえない程度にそう呟いた。

如月シュンツ！！（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

サ「ドラクエ5……………セーブ消えた……………」

み「夢だと言って!!」

サ「メタルキングの剣がカジノのメダル五万枚で、十万枚当たった時は凄い嬉しかったキタコレだったね」

み「主人公とスライムナイトのピエールに着けたもんね」

サ「順調に旅を進めて、苦労したピアン力を妻にした……………」

み「ピアン力苦労したもんね。その分一杯幸せになってほしいよね」

サ「裏技『ひとしこのみ』を使って全攻撃会心の一撃&モンスター必ず仲間もやった……………はぐりん仲間になったんだ……………」

み「もはや失われた太古の技術ですじゃ」

サ「王位も継承、双子という子宝にも恵まれ、順風満帆な人生な所で、消えました」

み「これからだと言うときに……………成長した子供の顔すら見れぬとは……………」

サ「SFC恐るべしッ!!」

み「ある意味パパスよりもムゴい仕打ちじゃんね。むしろ生殺し？」

サ「とりあえず結論としては、ドラクエ5の主人公は歴代のドラクエの中で二番目に不幸だよ、と」

み「一位は？」

サ「ヤングス……かな」

み「なんで？」

サ「顔が」

み「すつげえええ分かります」

レミントン

翌日、サボりもせず遅刻もせず学校に来た龍は健の姿が見えないことに気がついた。

「なあ、健って来てねエの？」

「あ？テメエ、レックスくんの敵だろ？何馴れ馴れしく……」

健の派閥の一人だと踏んで声をかけた相手はあからさまな敵意を見せて龍にガンをつける。

だが龍がそれを受け流せるほど人が出来ているわけではなく、胸倉を掴んで壁に叩きつけた。

「何いきなりケンカ腰になってンだよコラ？テメエ覚悟出来てンだろな！？トバすぞ？」

「分かった分かったヤメロよ！！分かったから教えるって！！」

見掛けによらず腑抜けだった相手は龍の脅しに手のひらを返したように態度を変えた。

この腰抜けを見てヤンキーと言えどもやはり色々いるんだな、と龍はしみじみと思い知らされた。

「で、健来てンの？」

「レックスくんなら先輩に呼ばれて今三年の溜まり場の美術室にいるよ。あそこはいつも開いてっから溜まり場になってんだ。」

「シューゴー掛かってンのか。何でヨ？」

「俺は知らねエよ。ただシューゴー掛かったから行くって言うてたんだよ。なあ、そろそろ苦しいから離してくんねエ？」

「おお……時間取らせたな。」

パツと胸ぐらを掴んでいた手を離し、相手の襟元を綺麗に正す龍。

「いやいやいやいやマジで……。じゃあ今後は言葉使いに気を付けるよ……」

ついでなのか、全てのボタンを閉め肩をポンと叩き龍は階段を上がった。

「……あれ？美術室って……どこだ？」

「テメエよ、なんで呼ばれたかわかるよな……？」

静かな美術室。

生徒の作った作品や絵が飾られ、所々の壁には絵の具が無造作に付着している。

そんなありふれた情景の垣間見える美術室では机や椅子に先輩等が健を囲むように座っていた。

「ガンマ先輩……俺にはサアアツツパリ、分かんないや。」

健は他の先輩等に囲まれ、ガンマと対面するよう形で椅子に座っているが、その態度にへつらいや恐怖は微塵もない。

むしろ挑発的な態度にも見てとれる。

「……レックスよオオオ、昨日オメエンとこのジョットが送られたそうじゃねエか……テメエもそのツラだしよオオオオオオ、二年の頭張ンのはテメエの勝手だがよ、看板にドロ塗ってンじゃねえよ。」

「看板にドロ？冗談、俺ア負けてねえツすよ。それにねガンマ先輩、俺ア二年の頭じゃねえ……楠中の頭だ！！腑抜けたアンタ等じゃ頼りになりそうにねエからよ！！」

ダンッッ！！

健が言い終わると同時に木製の机に彫刻刀が突き刺さった。ガンマが渾身の力で突き立てた彫刻刀は突き立てたきりで、微動だ

にしない。

「おい……どの口が言ってやがんだレックス！？周りが少しはデメエを認めてるからってフキ上がったンじゃねエぞ！！」

「アンタこそ声からビビってンのが丸わかりだぜ？俺のせいで俺の影に隠れてたもんなアア？なんならそのまま背後霊に化けさせてヤンか！？」

「デメエ……死んだぞ……？」

「殺してから言え。そーいうのはよ。」

周りの先輩が立ち上がり健に攻撃を仕掛けた。

健はすぐに立ち上がり背もたれのない椅子で周りの先輩達を三人吹き飛ばした。

「グアツ！！」

「ハッハア！！高々と十人足らずで俺を取れると思うなよ！！」

「ガキがアアツ！！」

背後から急に襲いかかる先輩。

だが攻撃をした直後に健が行動に移せるはずもなく、振り下ろされた警棒を防ぐことは出来なかった。

「ぐっ……！！」

頭に響く鈍い衝撃が健の視界と意識を揺らす。

「オメエ、リンチ喰らった後の体でハンデしょってるクセによく俺らにケンカ売る気になったな？」

「は……これでも足りねエかと思ったけどな……。」

「チツ……その減らず口叩けねエようにしてやるよ。ドタマカチ割つてなアアアア！！」

先輩は追撃の為、万力を込めて警棒を限界まで振り上げた。

だがその追撃は一人の生徒の登場によって遮られる。

「おーおーおったおった。そして痛々しいツラしとるなあ。」

先輩らはその生徒を見て固まる。

ガンマも、警棒を振り上げた先輩も。

ただ一人、健だけがその生徒を見ても驚いてはいなかった。

「おっ……学校来てたンか『レミントン』……。」

「ケンカか……？ケンカやな？やられとるンだな？なら加勢したる。」

そう言うとレミントンは制服を脱いだ。

レミントンの力士のような体が露わになった。

レミントン（後書き）

『みいとサリーの後書き無駄使いコーナー』

サ「viva la vida」

み「美しき生命」

サ「good news for people who love bad」

み「バッドニュースを好む者達へのグッドニュース」

サ「some where in out space」

み「宇宙のどこか」

サ「bleed like me」

み「私みたいに血を流せるの？」

サ「the beautiful people」

み「美しい人々」

サ「conspiracy of one」

み「誰かの陰謀」

サ「androgyny」

み「フタナリ」

み・サ「ちよっ!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4363e/>

ガールズハント！！『ルドラ』

2010年10月28日08時11分発行